

関口存男の疎開をめぐって：疎開文化人としての活動を中心に

柴田, 明子 / SHIBATA, Akiko

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

64

(発行年 / Year)

2022-03-24

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2022-03-24

(学位名 / Degree Name)

修士(国際文化)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

修士論文

指導教員 高柳俊男 教授

論文題名

関口存男の疎開をめぐって

——疎開文化人としての活動を中心に——

国際文化研究科 国際文化専攻 修士課程

氏名 柴田 明子

要旨

関口存男の疎開をめぐって
——疎開文化人としての活動を中心に——

国際文化研究科 国際文化専攻
修士課程 2 年 柴田明子

研究目的と背景

第二次世界大戦の戦中戦後には多くの文化人が地方に疎開していた。関口存男（せきぐち つぎお 1894〔明治 27〕－1958〔昭和 33〕年）もその一人である。本論文では、関口の疎開について、疎開にいたる経緯、疎開先での活動、疎開先に与えた影響を検証する。もって、疎開文化人の中で関口を位置づけ、疎開文化人研究への貢献をはかる。またこれは、関口の生涯について先行研究の欠けているところを補い、誤っている記述を指摘することでもある。従来、関口の疎開は一エピソードに過ぎないと見られていた。彼の疎開はたまたまであり、戦後に疎開先に一定の影響が残ったが、それも偶然の所産であって、疎開体験が戦後の関口の学問に痕跡を残すこともなかった、とされてきたのである。その見方を正したい。

関口存男はドイツ語学者として知られ、法政大学でも教鞭を執った。陸軍士官学校出身ではあったが、上智にも学んだ。劇団「踏路社」の立ち上げにもかかわり、法政大学でも演劇活動を行った。幾つかの出版社からドイツ語関係の著作を刊行する他、独仏語からの文芸翻訳の業績もある。多くの文化人が居住していた目白文化村で岸田國士など当時の文化人との交流もあった。

彼の疎開は 1945〔昭和 20〕年 3 月から 1948〔昭和 23〕年 11 月まで、疎開先は長野県妻籠である。当地で公民館の活動を指揮し、語学講座や講演会などを催し、とりわけ演劇指導には力を入れていた。その疎開の契機は、第一に、米林富男、勝野金政らとの人的な繋がりである。米林が主導し、妻籠出身の勝野が受け入れた。しかし、こうした個人的な理由の他に、当時の国策も関与していた。すなわち、出版事業疎開の一環であり、大政翼賛会文化部による政治的要請も勘案してのことだったと考えられるのである。

研究方法と資料

関口の疎開の契機・疎開先での活動は、それまでの彼の活動と結びついている。本論文では、まず、疎開に至るまでのいわば前史を、関口と繋がりがあった人々を取り上げつつ、演劇活動、目白文化村、法政大学での活動の 3 点から確認する。その上で、関口の活動を可能にした妻籠の素地、疎開の契機、および疎開先妻籠での活動の実際をそれぞれ検討する。

疎開文化人研究については、疎開文化人全般を扱った先行研究で既に役割と類型が提示されているが、そうしたシェーマと引き合わせ、合致するところ、ずれるところを示して、関口の疎開の特色を示す。

本研究が依拠する資料としては、先行の疎開文化人研究の他、関口自身の著作、関口についての刊行資料、未刊行資料（遺族・関係者の手記）がある。また、関係者への聞き取り調査も行っている。

論文の構成と内容

「0. はじめに」は問題設定である。

「1. 疎開研究と疎開文化人研究」は、疎開に関わる先行研究の検討である。全般的な枠組みを提示するものと、各事項を扱ったモノグラフを見ることによって、本研究の方向を示した。

「2. 関口に関する資料と生涯概観」は、関口に関する主な資料の提示と、それに基づいた関口の生涯概観である。

「3. 関口の疎開前史」は、疎開に至るまでの、演劇、目白文化村、法政大学の各領域での活動の詳述である。

「4. 関口の妻籠疎開」は、妻籠がどのような地であったのか、関口がなぜ妻籠に向かったのか、妻籠で何を行なったのかを述べたものである。公民館運動、米林と勝野金政との関係、出版事業疎開や大政翼賛会文化部との繋がりがテーマである。妻籠での活動で特筆すべきは、戯曲の執筆と上演およびそれに基づいた著作である。なかでも関口が執筆した『素人演劇の実際』（1947〔昭和22〕年）、戯曲「争え、但し怒るべからず」（1947〔昭和22〕年）を検討した。後者は同年の公民館表彰や、後代の町並み保存に繋がるものである。

「5. まとめ 関口疎開研究の問題点と今後の課題」は以上にもとづいたまとめである。

結論

これまで疎開文化人研究において、妻籠が取り上げられることはなかった。また、公民館運動・社会教育史の研究の中で妻籠の演劇が取り上げられたことはあったが、当事者であった関口については十分に論じられてこなかった。関口について論じる諸家はいてもドイツ語学を中心としており、演劇に意味を持たせていなかった。演劇史の中で関口が言及されても妻籠での演劇活動については触れられてこなかった。本稿は、以上のようなバラバラであったものを疎開文化人としての関口を軸にまとめたものである。

疎開文化人としての役割としては、特に青年たちおよび公的団体との関わりにおいて、関口は戦後の新しい運動をもたらした存在であったと言える。妻籠にいたのが関口だったからこそ、公民館運動に代表される戦後の妻籠があったのである。

目次

0. はじめに	1
1. 疎開研究と疎開文化人研究	2
1-1 枠組みと全般的な研究	／ 2
1-2 モノグラフほか	／ 5
2. 関口に関する資料と生涯概観	8
2-1 関口に関する資料	／ 8
2-2 関口の生涯	／ 10
3. 関口の疎開前史	17
3-1 演劇活動	／ 17
3-2 目白文化村	／ 24
3-3 法政大学での活動	／ 28
3-4 法政騒動	／ 33
4. 関口の妻籠疎開	35
4-1 なぜ妻籠に向かったのか	／ 35
4-1-1 妻籠と公民館	／ 36
4-1-2 米林富男と勝野金政	／ 40
4-1-3 出版事業疎開の一環として	／ 43
4-1-4 大政翼賛会文化部による政治的要請	／ 46
4-2 妻籠での活動	／ 48
5. まとめ 関口疎開研究の問題点と今後の課題	56
文献	／ 60

0. はじめに

第二次世界大戦の戦中戦後には学童だけでなく、多くの文化人が地方に疎開していた。作家では太宰治（1909〔明治 42〕－1948〔昭和 23〕年）や丸山薫（1899〔明治 32〕－1974〔昭和 49〕年）、横溝正史（1902〔明治 35〕－1981〔昭和 56〕年）、学者では高津春繁（1908〔明治 41〕－1973〔昭和 48〕年）や津田左右吉（1873〔明治 6〕－1961〔昭和 36〕年）、三木清（1897〔明治 30〕－1945〔昭和 20〕年）、芸術家では棟方志功（1903〔明治 36〕－1975〔昭和 50〕年）などその数が多い。後述するように、こうした文化人の中には、ただ戦火を逃れ、あるいは自身の研究に没頭していた者だけでなく、疎開先の人々とともに文化啓蒙活動をおこなっていた者もいた。こうした、いわば疎開文化人と呼びうる人々の活動とその影響についてはこれまでも様々な視点から研究されている。詳細は後述するが、たとえば、都市・農村の関係から疎開を考察したもの、戦中の疎開文化人の活動と戦後の文化運動とのつながりを考察したもの、作家、芸術家、社会運動家等個人の疎開について論じたものなどである。また、文化が戦中から戦後へと繋がっていることも指摘されている。その他、町村誌等に断片的に疎開文化人の事例が記録されていることもある。

本稿では、疎開文化人の一人として関口存男（せきぐち つぎお 1894〔明治 27〕－1958〔昭和 33〕年）に焦点を当てる。ドイツ語学者として知られ法政大学でも教鞭を執った関口は、1945〔昭和 20〕年 3 月から 1948〔昭和 23〕年 11 月まで長野県の妻籠へ疎開をしており、そこで公民館の活動を指揮し、語学講座や講演会などを催し、とりわけ演劇指導に力を入れていた。

本論では、関口の疎開について、疎開にいたる経緯、疎開先での活動、疎開先に与えた影響を検証することにより、疎開についてそして、疎開文化人について考えたい。そして疎開文化人の中に関口を位置づける。管見の限りでは、関口の疎開について詳しく論じたものはなく、また関口自身に関してもまだ判明していないことが多い。数少ない評伝においては事実かどうか確定するのが難しいことも書かれてしまっているのが現状である。本稿で関口の妻籠疎開について調査し、そのいきさつを追うこと、これは関口の生涯について欠けているところを補い、誤っている記述を指摘するものになるはずである。

疎開文化人研究とはいえ、疎開時代だけを見ていたのでは理解できないこともある。本論では、関口の疎開の前史にあたる、演劇活動、当時の文化人との交流、法政大学での活動やいわゆる法政騒動もとりあげ、彼の疎開との関係を考察する。疎開先で関口はそれまでの経験を活かして地元の人々とともに演劇活動を行い、また語学講習などもしていることから、彼の来し方を無視することはできないのである。また、疎開の契機もその前史の中に認められるのである。ここでは、関口側からだけでなく、彼を受け入れた疎開先での反応・継承についても論述する。

1. 疎開研究と疎開文化人研究

1-1 枠組みと全般的な研究

疎開に明確な定義はないが、本稿では、第二次世界大戦末期、都市の学童や老人、女性などを田舎に避難させた政策、また、そうした人々の他に成年・壮年も含めた避難・移住とする。時期としては、東京都からの学童集団疎開が始まった 1944〔昭和 19〕年 8 月から、1945〔昭和 20〕年 8 月の終戦と 1947〔昭和 22〕年 3 月の「都会地転入抑制緊急措置法」の解除を経た 1950〔昭和 25〕年頃までとする。関口にも及んだとされている 1946〔昭和 21〕年 1 月からの公職追放令による追放も 1949〔昭和 24〕年 2 月には特免措置が講じられ、1951〔昭和 26〕年には第一次追放解除があり、1952〔昭和 27〕年には追放令そのものが廃止されている。

但し、記述をこの時期に限るのは、疎開に関する先行研究で提示されていることから言っても、関口の生涯から言っても狭すぎる。疎開文化人を扱うとしても疎開時代だけを孤立して扱うことはできない。

まず、広く日本の近現代をめぐる幾つかの時代区分が提唱されている。本稿の文脈では、戦前・戦中・戦後の文化・文化活動の連続性ないしは不連続性に関わる。たとえば、大門正克他（2003）では、日本の近現代が 2 つに区分されており、明治維新から 1920 年代まで、1930 年代から現代までとなっている¹。赤澤史朗・北河賢三（1993）はファシズム期日本の文化に関する研究史を振り返りつつ、1937〔昭和 12〕年から 1945〔昭和 20〕年を 1937 年～、1940 年～、1941 年～の 3 期に分けている²。第 3 期の戦中期は「あらゆる文化活動を支える物的諸条件が次第に失われていく」なか「『国策協力』のための組織の一元的統合が完成する」が、その内部では「かなり異質な志向を雑居させることにもなっ」ていて、「戦後の文化運動にほとんどそのままつながるような流れと、戦後は全く途絶えてしまう流れの、二つが見られたのである」（赤澤・北河 1993:8）。彼らの言うこれら第 2、3 期すなわち 1940 年からの時代が終戦で途切れたのではないとして、1940 年代を連続で見る見方も示されている。赤澤（1995=2001）は、1940 年代の文化状況を前半「一九四〇年の近衛新体制の成立から敗戦に至る時期」と敗戦後の後半との 2 つに分ける。赤澤は両時期の差異を論じつつも、「文化活動を展開するうえでの枠組みの激変にもかかわらず、他面で一九四〇年代

¹ 「第一次世界大戦後にはじまった日本の現代化が、その後、一九三〇年代、戦時期、敗戦、占領、高度成長といった初段階をへるなかで進行したこと、戦時経験の重みは戦後になっても長く残り、戦時の意味が戦後のなかでたびたび問われたこと、これらを考え合わせると敗戦で区別するよりも、現代化の画期と戦時を含む一九三〇年代で区別する方が適切である」（大門他 2003:4）

² 「第一期は、一九三七年の日中全面戦争の開始と同年末からの人民戦線事件とを画期として始まる時期」で、「新たに国家総動員の課題に応じて、『国策協力』に向けて国民や文化人の動員をはかる『積極的』統制政策が生まれてきた」時代である。ただし「必ずしもすべての思想・文化活動が国家の側に取り込まれたわけではない」。「第二期は、一九四〇年夏の近衛『新体制』に始まる時期」で、「文化の各ジャンルごとにつくられる『国策協力』団体への、一元的統合の動きが表面化した」が、ただし「なんとか文化人の自主性を擁護しようとする志向と、これとは逆に国家統制を貫徹させようとする方向の二つが、せめぎあう」時代である。「第三期は、アジア・太平洋戦争期」。以上、赤澤・北河（1993:7-8）

の前半期の文化状況と後半期の文化状況との間には、ある種の共通特色が見いだせる」(以上、赤澤 2001:297)としている³。戦中戦後の文化研究については、赤澤・北河(1993)が戦時下の文化活動を「大きくは新たな国家統制の動きと、これに対する自主性の擁護の動きの、二つの対抗を基軸として捉えていく」(赤澤・北河 1993:8)⁴、戦中戦後を繋げて、大門他(2003)は「戦争と文化」といった章立て⁵で「固有名詞をもった人々の歴史」(大門他 2003:3)を軸に大きな流れを記述している。以上のような諸家の図式は、見取り図を示している。

一方で、疎開文化人が何らかの役割を果たすためには、受け入れ先の地方なり農山村にある程度の素地が必要であった。そうした素地を扱ったものに北河(1997)がある。これは、1940年前後に始動した地方・農村文化運動を記述したものである。この運動には、農山漁村文化協会(農文協)による農村文化運動と、大政翼賛会文化部が主導する地方文化運動の2つがある⁶。ここで重要なのは、新体制運動のもと「文化の各ジャンルにおいても団体統合

³ その特色は、1:「文化と政治の密接な関わり」/2:「それぞれの文化の領域で知識人・文化人と民衆との接近が積極的にはかれようとしたこと」/3「この時期が、日本の近代化過程への問い直しがおこなわれた時期であったということ」(赤澤 2001:298)

⁴ 所収論文に、たとえば赤澤「大日本言論報国会——評論界と思想戦——」、北河「戦時下の地方文化運動——北方文化連盟を中心に——」がある。

⁵ 29-57 頁。執筆者は若桑みどり。

⁶ 北河(1997)は、このうち前者の農村文化運動を後者と対比しつつ性格を明らかにし、運動の検討を通じて、「戦中から戦後初期にかけての地方・農村の文化状況を明らかにすること」(330)を課題としている。農文協の事業には、映画、紙芝居、演芸、劇団の派遣など慰楽事業と称された芸能活動(334)と指導・調査・出版事業(指導事業)がある(334-341)。前者は戦中から力が注がれたものであり、中でも特に「異彩を放っているのが、協会専属の瑞穂劇団の創設である」(338)。瑞穂劇団の地方公演は「地方青年の演劇熱を刺激し、農村素人演劇の素地を培う役割を果たした」(338)。戦後、農文教の幹部によって部落単位の集会所・農民クラブ設立が提案されるが、これは公民館構想と競合したこともあって失敗した(341-342)。戦後の農村には主として復員青年達に演芸熱の高まりがあつて(343)、「一部は戦前以来の素人演劇と結びつき、演劇活動が活性化した」(344)。なお、1942〔昭和 17〕年発足の瑞穂劇団の副団長は飯塚友一郎とあるが、かつて彼の劇団で関口も役者として舞台に立ったことがある(飯塚友一郎主宰の創作劇場第三回公演「指鬢外道」(柳原白蓮 作/邦枝完二 演出)で関口は関口次雄という芸名で婆羅門役で出演している(1920〔大正 9〕年、関口 26 歳の時、於下谷市村座)。北河(1997)はここで、長野の事例を紹介している。諏訪の藤森成吉の演劇講座、疎開していた須山計一たちによる 1945〔昭和 20〕年 11 月からの全信州美術展(長野、上田、松本、飯田、上諏訪)と信州美術会の結成である(344)。「戦時中の地方文化運動の流れをくむ文化団体やその他の団体・サークルが各地に簇生し」「地方文芸・地方文化雑誌が次々と復刊・創刊され」「『図書館に対する真剣な要求』の高まり」もこの時代である(344)。こうした中、戦中からの農文教の方針は批判され、「いくつかの支部では独自に自主的に文化運動を開始」する(345)。例としてあげられているのは、八木林二が中心となった長野の文化運動で、1946〔昭和 21〕年 3 月から 47〔昭和 22〕年 2 月に 96 箇所で開催された農村青年文化講座が実施されているし、講演をまとめた「農村文化叢書」の刊行、読書会の組織化、48〔昭和 23〕年の 4 月の「農村青年通信講座」創刊も見られた(345)。すなわち、「次第に農村青年による自主的な農村文化運動として定着」が認められるのであり、「国策遂行と不可分のものであった戦前以来の娯楽の供給を中心とする農村文化運動は、戦後においてはもはや無効であることが明らかとなつて」「地方でも従来の運動に対する批判が高まり、それを克服しようとする動きのなかで、長野県をはじめいくつかの地方で新たな農村文化運動が始動したのである」(346)

の推進や統制機関の樹立がはかられるようになった」ことで、「あらゆる文化領域が国民教育の手段とされていく」（以上、北河 1997:301,302）ことである。これは、岸田國士（関口の知人である）が大政翼賛会文化部長に就任（1940〔昭和 15〕年 10 月）し「政治に文化性を与える」ことに繋がっていた⁷。この大政翼賛会文化部については北河が大部の資料集たる北河編(2000)を用意している。

文化を考える上で出版は重要なファクターである。戦中の出版に関しては、岡野他家夫（1981）に出版事業令の公布、日本出版会のことなどが解説されている。

こうした多くの先行研究と諸家の議論を深入りせずまとめれば、1930 年代あるいは 1940 年代から戦後に至るまでが連続した時代として捉えられるということである。戦後を新しい文化の時代として独立して考えるのではなく、戦前・戦中からの繋がりの中で捉えようという、こうした態度を本稿でもとることにしたい。

疎開の全般的な枠組み提示としては黒川みどり（2006）の都市・農村の関係から疎開を考察したものが挙げられる。黒川の関心は、疎開と配給を軸に「戦時を通じて都市と農村を中心とする地域秩序がいかに変容したのか」（黒川 2006:31）にあった。疎開遂行によって都市と農村の対立は更に明らかになって、「生活習慣や価値観といったレベルでは、異質なものの対立をより浮かび上がらせる結果を招来した」（黒川 2006:36）。疎開者達が引き上げる際も「〔疎開者と疎開先住民の〕戦時の一時の接触が双方の溝を埋めることは容易ではなかった」（黒川 2006:52）のである。但し、「疎開は、都市と農村の境界を、少なくとも人の移動という点において一定程度揺るがしたのである」（黒川 2006:53）。そして、「疎開は都市と農村の溝を深める方ばかりに作用したのではなく、農村を文化の発信地たらしめるきっかけとなった例も見られる」（黒川 2006:54）としている。

そうしたきっかけの一つが疎開文化人であり、北河（2000）もそこに着目する。北河は「戦後の出発」という観点から「敗戦後の社会と地域文化の様相を明らかにしようとする」（北河 2000:10）。ここでは「戦中・戦後の連関」が取り上げられ、「文化運動は戦時中に途絶えたのではなく、翼賛運動の一翼として推進されたのであるか、戦後の文化運動を検討する際には戦時期の文化運動との関係に注意を払う必要がある。」（北河 2000:24-25）としている。

北河によれば、戦後の文化運動として 4 種が挙げられる。

- 1：青年および女性の団体で、青年団および婦人会
- 2：地方文化人が主導する地域の文化団体
- 3：社会教育行政機関・社会教育団体
- 4：労働組合文化部や職場サークル

⁷ 赤澤(2001:303)。赤澤（2001）はまた、1941〔昭和 16〕年 1 月大政翼賛会文化部「地方文化新建設の根本理念及び当面の方策」での地方文化団体の結成（306）は「多くの文化人を翼賛文化運動の指導者として活躍させようと考えていた」（307）のものであるとする。そこには、読書運動、移動演劇(308-310)があった。その後の 1944〔昭和 19〕年 7 月東条政権倒壊の後の小磯内閣「言論暢達」政策は「思想・言論統制の枠を一気に緩めることによって、戦意昂揚のエネルギーを調達しようとした」（312-313）のものであった。

そして、1-3 のいずれにも疎開文化人が関わっていたとするのである(以上、北河 2000:16-18)。本稿も戦時中の関口やその翼賛運動との関わりを彼の戦前の活動とともに論じる。

但し、文化人の役割についてはより広い文脈で捉えられる。関口も時代という文脈に置かれた知識人の一人であったことも忘れないでおこう⁸。

1-2 モノグラフほか

そもそも疎開研究は、具体的にいつ何があったのか、一つ一つの事例を明らかにすることから始まるのであろう。疎開文化人であればそれぞれの伝記の中で、本筋から離れたエピソードとしての扱いであっても、ともかく記録されている。また疎開文化人自身が自伝で触れたり、作品の中で題材にすることもある。個人に注目することは歴史学でも行われていることである。大門他(2003)は、「それぞれの人の経験には必ず時代が反映している」、「それぞれの時代における経験のリアリティを伝える」とし、「固有名詞をもった人々の歴史」すなわち「小文字の歴史」の重要性を主張している(以上、大門他 2003:3)。こうした個人の記録を掘り起こしながらのアプローチは本稿でも行うところである。

歴史研究のスタンスをとりつつ個別具体的な事例・人物に特化したモノグラフとして、たとえば、戦後の社会教育実践の事例を扱った笹川孝一(1986)や戦後民主化過程の事例を考察した安岡健一(2009)がある。

笹川(1986)が取り上げている事例は「庶民大学三島教室」である。教室は1945〔昭和20〕年末から構想され、1946〔昭和21〕年2月に正式発足し、展開・分裂・再建を経て1948年〔昭和23〕6月に終焉を迎えた。笹川論文は、その歴史的意義を考察することで、戦後の社会教育実践の過程を明らかにすることを目的としている。具体的には、木部達二(1915〔大正4〕-1948〔昭和23〕年)の生涯と活動を、生誕時から人格・思想形成に影響した各モメント(家庭・生育環境、労働争議の体験、大学人としての研究歴、末弘厳太郎・丸山真男らとの交流)を同時代人の証言なども用いつつ追跡し、彼の実践である庶民大学三島教室を記述・分析している。前提とされるのは終戦前後の社会経済情勢であり、木部の三島教室の成立基盤に彼以前の戦前戦中の社会教育実践の「遺産」があったという。三島に疎開し

⁸ 赤澤(2001)の言うところを示せば、終戦とは「第二の開国」であり、また「『もう一つの戦前』〔……〕の復活」であった(赤澤 2001:314)。文化への欲求が高まったが「現実に与えられたものの多くは一般的・教養主義的なものであった」。「与えられる文化の多くは、基本的には戦前や戦中の水準に止ま」っており、欲求とギャップがあって「実際にはその文化も娯楽も、多くは古い手持ちの材料から組み立てていかざるをえなかった」。「復員した青年たちによって、ほとんど全国の農村で股旅ものなどの素人芝居が大流行するが、これは軍隊のなかでおこなわれた演芸会の延長であったと言えよう」(以上、赤澤 2001:315)。「こうしたなかで外国語ができ、連合国たる欧米先進諸国の事情に多少とも明るく、比較的広い視野を有する知識人や文化人が、ともかくも政治や社会の未来像を提示できる唯一の主体として浮上してくるのである」「地方に疎開していた知識人・文化人たちは、敗戦直後の時期から急変する現実や世界の情勢についての解説を求められ、地元の国民学校などを会場として講演会が開かれる。」(以上、赤澤 2001:317)。

ていた本部が積極的に働きかけ、それが庶民大学三島教室成立の契機となった。それゆえ彼の実践は戦後の社会教育実践史というより広い文脈で捉えられるべきとしている。

安岡 (2009) は、プロレタリア作家として知られる貴司山治 (きし やまじ 本名 伊藤好市 1899〔明治 32〕－1973〔昭和 48〕年) の日記を主たる材料とし、戦後民主化過程の事例として京都府の開拓地における彼の活動を考察するものである。疎開は戦時末期・戦後初期における地域社会への人の「移動」であって、社会的影響があった。安岡はそうした事例の地道な発掘作業が重要と考えており、論文では具体的に、貴司の京都への疎開・入植 (1945〔昭和 20〕年 4 月頃～1948〔昭和 23〕年 1 月) に至る契機、敗戦後の文化活動や開拓農民運動、京都府農地委員としての活動、GHQ との交渉などが記述される。安岡は更に、京都の民主戦線運動との繋がりに言及しつつ、1948〔昭和 23〕年 1 月の貴司の帰京後の開拓農民運動のその後を更なる研究課題としている。

こうした歴史研究の事例として個人の活動に焦点をあてた論考のほかに、個別の文化人の疎開先での活動をその文化人論の見地から論じるものがある。すなわち、作家論の一環として疎開を扱うものであり、その一例として、井上雄次 (1997) が挙がる。詩人・丸山薫 (1899〔明治 32〕－1974 年〔昭和 49〕年) 研究である。丸山は 1945〔昭和 20〕年 4 月、45 歳の時に山形県岩根沢に疎開し、当地で代用教員をつとめた。井上の意図は、岩根沢における丸山の「三年間の生活の事実を掘り起こし確定」 (井上 1997:4) することであり、それが丸山研究に役立つとしている。

歴史研究・文化人研究の両者を統合するような形をとりつつ、違った問題意識での研究もある。疎開先で文化人が何をしたかをメインに研究するのではなく、疎開というものが、戦後の文化にどのような影響を与えたか、どのような痕跡を残したか、戦後文化史の源流として疎開を見る立場である。たとえば李承俊 (2019) は「疎開体験がその後の戦後の意識にどう伝えられ、戦後意識の形成にどう関わってきたか」をテーマとし、学童疎開、疎開派、疎開の描かれ方をトピックとしている。

社会教育研究の観点から、まさに妻籠や関口達の活動を研究したものに中田スウラ (1985) や大槻宏樹 (1985) がある。これらは、早稲田大学大学院自己教育研究会のメンバーによる 1983 年から行った調査に基づくものである (大槻 1985:42)。彼らの調査報告と考察は複数の媒体で複数回、発表されたはずだが、2 編だけ示す。

中田は「社会教育研究の空白部分とも言える戦後初期公民館に関わる諸活動を、そこに参加した青年達の自己形成を捉える視点から、実態的に研究していくことが必要である」 (中田 1985:79) とし、この上で中田は、妻籠公民館の設置背景である御料林問題にふれ、妻籠公民館・公民館運動の性格として、設置運営についての文部次官通達や寺中構想⁹といった「官製的な公民館を批判的に捉えた上でのものである」 (中田 1985:81) としている。すなわち、「村内の切実な生活問題を解決していくことをはじめとし、『民主化を実現すること』

⁹ 公民館は、1946〔昭和 21〕年 7 月 5 日文部次官通牒「公民館の設置運営について」によって誕生する。この時文部省社会教育局成人教育課長であった寺中作雄の名をとって公民館構想は「寺中構想」と呼ばれている。

と受けとめ、その責任を担うものは青年達自身であると自覚した」のであった（中田 1985:81）。ここで、「公民館の基本構想づくりの段階から話し合いに加わり、青年達のよき理解者であった二人の疎開文化人、米林富男、関口存男、加えて発起人とも言える勝野時雄、これら三人の協力を得ながら、妻籠公民館活動は開始されていく」（中田 1985:81-82）。中田(1985)は、この過程を勝野時雄の著作、鈴木健次郎の公民館記事をもとに記述している。中でも独立した章をたてて描かれるのが「妻籠公民館運動における演劇活動」（中田 1985:82-85）である。公民館運動の中での青年達の学習活動でふれる新しい知識、視野は外来の文化なのだが、それが行動と結びつくためには「青年達自身の考え方、体験によって認識し直され、表現し直されることが必要である」（中田 1985:83）。演劇活動がそうした重要な役割を果たすが、そこに関口の関与があった。「青年達の創作演劇の代表作は、関口作の『争え！但し決して怒る可からず』¹⁰、並びに『王様と予言者』の二つである」（中田 1985:83）としているが、中田は、その影響の大きさも示している。たとえば、「争え！但し決して怒る可からず」は村内の合い言葉になった（中田 1985:84）。また、演劇活動で青年達がそれぞれの役割を果たす中で「話し合いのルール」が体现され、「各自が異なる人格を持った主体的な存在であることを容認し、相互に主体的に理解し合う関係を築かざるを得なかった」（中田 1985:85）。その上で、彼ら青年の理解を「コミュニケーションの最も基本的な媒体である『身体』を通して、即ち、青年達独自の表現方法である『上演』を通して、彼らは、観衆である村人達と共有しようとした」（中田 1985:85）。つまり、「妻籠公民館運動によって、青年達の創作演劇活動の占める位置は非常に大きい」のであり、「青年達にとって、妻籠公民館は、各自を自立した存在と容認しつつ、相互間に鋭い緊張関係を保ちながら営まれる徹底した『話し合い』の場であった」（中田 1985:86）。青年達はこの「話し合いのルール」を公民館の基本姿勢とし、公民館運動へと反映させていったのだが、それは創作演劇活動から学んだのだった（中田 1985:86）。ここには、関口の関与の大きさがうかがえる。

大槻も同様に、妻籠公民館運動を寺中構想とは違った、「むしろ『運動体』の色彩をもっていた面をもつ」（大槻 1985:29）ものとし、公民館を「『施設ではなく』、『運動体』¹¹としてみたところに妻籠公民館の特徴があったといえる」（大槻 1985:30）とする。そして、大槻もまた「妻籠公民館活動の中で特筆すべきは、その演劇活動にあると思われる」（大槻 1985:30）として、演劇活動が、「話し合いのルール」、「自己表現」による「弱者連帯」、「社会性の認識」、公民館「運営における深化」、総じて言えば「創作演劇活動からの民主化運動への広がり」（大槻 1985:30）をもたらしたとする。なお、関口の『争え！但し決して怒るべからず』が演劇活動の代表とされているが（大槻 1985:29）、関口の名は示されていない。大槻の関心は、戦後初期の具体的な活動を越えて、その後の妻籠演劇研究会（1948〔昭和 23〕年発足）の活動や妻籠の町並み保存の住民活動にあり、更には、戦後における

¹⁰ 引用中にはこの表記が使用されていることが多いが、ガリ版刷りの原本では『争え！但し怒るべからず』となっている。この作品は後に『教育と社会』（社会教育連合会、1948〔昭和 23〕年 9 月 1 日:54-59 頁）に掲載されるが、その時のタイトルは「争え、但し怒るべからず」である。

¹¹ この記述の元となっているのは、勝野時雄「戦後初期の公民館―長野県木曾妻籠公民館活動の場合―」『月刊社会教育』No.98、国土社、1966〔昭和 41〕年:88-94 頁。

社会教育と自己教育を理論的に考察することにより、妻籠公民館運動はいわばそのマクラであった。

上記の他、疎開先の地域史編纂の一環で、規模・精粗さまざまに町村史という形で疎開と疎開文化人が記録されている。たとえば、『南木曾町誌 通史編』（1982）や『南木曾の歴史 歴史資料館展示図録』（1996）、『企画展「埼玉へ疎開した文化人たち」』（2001）である。前 2 者には関口への言及も見られる。地域振興あるいは町並み保存の観点からの西村幸夫他（2007）といったものもある。なお、当該書籍には妻籠の章もあるが、関口への言及は見当たらない。

2. 関口に関する資料と生涯概観

2-1 関口に関する資料

関口の生涯を示す主な資料としては、以下のものがある。

刊行されているもの：

関口存男『関口存男著作集』 全 23 巻+別巻、三修社、1994〔平成 6〕年。

荒木茂雄他編『関口存男』 三修社、1959〔昭和 34〕年。

中村英雄「関口存男の横顔」『池上草堂襍記』 角川書店、1989〔平成元〕年所収。

池内紀『ことばの哲学 関口存男のこと』 青土社、2010〔平成 22〕年。

未刊行資料：

関口存哉『関口存哉 随筆集』 関口信男、2007〔平成 19〕年。

関口日記 1913〔大正 2〕年 12 月 4 日～1918〔大正 7〕年 10 月 11 日、1919〔大正 8〕年、（5 日分）、1920〔大正 9〕年（10 日分）、1922〔大正 11〕年（7 月 3 日付のみ）。

『勝野金政宛関口書簡』 1948〔昭和 23〕年 12 月（日付不明）。

勝野金政『今日の妻籠』 手記、「昭和五十七〔1982〕年四月」という日付あり。

米林富男『夜明け前』 手記（執筆年不明）。

『関口存男著作集』は、生誕 100 周年記念として刊行され、1994 年時点で確認できていたものの中で、関口のドイツ語学習書、専門書、ドイツ文学の翻訳、創作を集めたものである。担当編集者は柴田明子（本修士論文著者）。その後、ドイツ語教材レコード盤、フランス文学の翻訳、ラテン語の参考書、演劇に関するもの、雑誌等に寄せた原稿等¹²が見つかっている。特に雑誌の記事については、記録がないため、今後思いがけないところから発見されることも多いのではないかと予想される。

¹² たとえば、「独逸語の初歩（その一）～（その四）」（Columbia Educational Records）、アレクサンドル・デュウマ・フィス著「椿姫」（『椿姫・タイス』世界名作大観各国篇第 14 巻、国民文庫刊行会、1927〔昭和 2〕年、森田草平と共訳）、「モリエールの横顔」（『新東京』第三号、劇団新東京事務所、1931〔昭和 6〕年）、『ラテン語初歩』（英語英文学刊行会、1934〔昭和 9〕年）、「わがフランシスカの讃」（『世界名詩選集 悪の華』ボードレール著、矢野文夫訳、創人社、1952〔昭和 27〕年：127-128。このラテン語原文の一篇のみ関口訳）、「身體を酷使して熟睡」（『丸』6(11)、聯合プレス社、1953〔昭和 28〕年：37）など。

『関口存男』（表紙は『関口存男』だが、背には『関口存男の生涯と業績』と記されていた。後に背に合わせて『関口存男の生涯と業績』とされた）は、関口逝去の翌年 1959 年に刊行された。責任編集として名を連ねているのは、法政大学での関口の最初の弟子である荒木茂雄、関口主宰のドイツ語雑誌同人の真鍋良一、法政大学で同僚でもあった藤田栄である。関口のエッセイ、詩の翻訳、戯曲、日記、書簡などとともに、遺族、友人、知人、教え子たちからの寄稿、年譜、業績と著書から構成されている。ドイツ語学者が中心に編んだということ、また、非常に急いで刊行されたということもあり、特に業績、著書、年譜については、補いが必要であると思われる。

「関口存男の横顔」を書いた中村英雄は、関口の晩年に直接教えを受けている。全 16 頁の小論だが、関口の生い立ちからその人生、教育・学問に熱心だっただけでなく実務家としても優れていたこと、関口の思想形成の分析など細かに丁寧に書かれている。

池内紀『ことばの哲学 関口存男のこと』は、雑誌『現代思想』に 2004 年から一年間連載した記事をまとめたものである。関口の人生を語るのは、余りに多岐にわたるため、簡単にまとめるということはほとんど不可能である。あとがきには、関口の次男存彦、関口の孫にあたる信夫（ここには「信夫」とあるが、関口の長男存哉の子息信男のことであろう）とやりとりをしながら、もっと詳しく書けるところあえてここでとどめた旨が記されている。しかし、情報ソース自体が少ないことは否めない。こちらも補いが必要であるように思われる。

その他、田中美知太郎¹³、野上弥生子¹⁴など同時代人の証言も、それぞれの著作集等に残っている。法政大学校史¹⁵で言及もされている。

関口日記のコピーは慶應義塾大学（日吉）所蔵。存男の孫である慶應義塾大学関口一郎教授（1946〔昭和 21〕－2001〔平成 13〕年）の縁と思われる。

親族のもとに資料はさまざまあると思われるが、詳細は不明。

関口の疎開に直接関わった勝野金政、米林富男の手記は、疎開のいきさつ、疎開先での生活を調べる上で重要な資料となっている。これについては、「4-1-2 米林富男と勝野金政」の項で詳しく述べたい。

関口は法政大学教員であったが、履歴書等は現段階で発見されていない¹⁶。

なお、三修社では 2018〔平成 30〕年から 2019〔平成 31〕年に関口存男没後 60 年を記念し関口存男展（Der Mann des Wesens「存在の男」展）を開催した。その内容は、関口存男と三修社／関口存男と演劇／関口存男と社会活動／家庭人としての関口存男である。展示品は社内にある資料の他、遺族、コレクターの方から提供を受けた。

¹³ 田中美知太郎『時代と私』 文藝春秋、1984〔昭和 59〕年。

¹⁴ 野上弥生子の日記 『野上弥生子全集』第 II 期 岩波書店所収、1986〔昭和 61〕－1991〔平成 3〕年。「小鬼の歌」 『野上弥生子全集』第 6 巻 岩波書店所収、295-362 頁、1981〔昭和 56〕年。

¹⁵ HOSEI ミュージアムホームページ、デジタルアーカイブ欄に関口について記載あり。

<https://museum.hosei.ac.jp/archives/Users/Top> 資料番号 daigakushi-p-112（2021 年 9 月 1 日閲覧）

¹⁶ HOSEI ミュージアムでは資料、情報の提供を受けた。履歴書等の発見には至っていないとのことであった。

上述の資料を他資料で補いつつ、関口の生涯を以下にまとめる。

2-2 関口の生涯

関口存男はドイツ語学の権威として知られ、数多くのドイツ語教科書、参考書、研究書、語学雑誌、翻訳書を出している。関口を知っている人の多くは枕詞のように「ドイツ語の」と付け加えるだろう。本稿でもドイツ語学者としての関口を記述する。しかし、彼はその「ドイツ語の」という枠には入りきれない人物であった。彼のさまざまな顔、そして多岐にわたる活動は未だ解明できていないことが多い。不正確な記述のまま、そして明らかにならないまま少しずつ忘れられようとしている、というのが現状である。

関口は、父存啓、母品の長男として1894〔明治27〕年に兵庫県姫路市に生まれた。1894年は、日清戦争が始まり、島崎藤村に影響を与えた北村透谷が自死し、北里柴三郎がペスト菌を発見し、樋口一葉が「大つごもり」を発表した年である。同年生まれには、ニキータ・フルシチョフ（－1971〔昭和46〕年）、ジャン・ルノワール（－1979〔昭和54〕年）、江戸川乱歩（－1965〔昭和40〕年）、松下幸之助（－1989〔平成元年〕）、西脇順三郎（－1982〔昭和57〕年）、葉山嘉樹（－1945〔昭和20〕年）、徳田球一（－1953〔昭和28〕年）、のちに関口を演劇の世界に誘うことになる村田実（－1937〔昭和12〕年）らがいる。

父、存啓は陸軍主計大尉であった。西南、日清、日露戦争に出征している。早くに現役を退いた存啓は、教育熱心で、存男の他に娘ともう一人息子がいたのだが、子ども達は皆成績が良かったという。しかし、存男の姉と弟は早世している。後に存男が演劇の世界に入った頃、母親は長女と次男を相次いで喪った悲しみから「屑が残った」と言って嘆いたという逸話（『関口存哉 随筆集』〔以下『随筆集』〕:9）が残っている。

1908〔明治41〕年、大阪陸軍地方幼年学校に入学。この時、姫路で幼年学校に合格したのは存男だけであった。生涯を通して文字通り死ぬまで研究を続けることになるドイツ語との出会いはこの幼年学校においてである。幼年学校在学中、寂しい寮生活と理不尽に上級生に殴られるという辛い毎日で、何かにかじりつこうとした時「ドイツ語が一番手近にあつたきりの話です」（関口存男『趣味のドイツ語』〔以下『趣味』〕:325）と関口は自身の回想「わたしはどういう風に独逸語をやってきたか？」の中であっさりと書いている。最初に読んでやろう、と購入した本はレクラム文庫の独訳の『罪と罰』であった。「千頁近くもある本を、わけもわからぬままに、二年ばかりかかつて数百頁よみました。するとどうでしょう、おしまい頃には、なんだか……わかり出したのです！」（『趣味』:237）。このような、尋常ではない勉強の仕方ドイツ語を頭の中にたたきこむことに彼は14歳からの2年間を費やしたのだった。当時の同級生の手記¹⁷（『関口存男の生涯と業績』〔以下『生涯と業績』〕、1959、三修社:99）によれば、その日に読んだ分をベッドに入ってから同室の級友たちに続き物のように聞かせたこともあったようだ。この頃には既にドイツ語だけでなく、フランス語、ラテン語、エスペラントも学び、中国語もできたとある。前掲の手記には、漢文の時間

¹⁷ 岩仲廣知「関口さんの思い出」

に、漢詩を読むように当てられた関口は、訓読ではなく中国語で読んで教官を困らせたというエピソードも記されている。

陸軍中央幼年学校本科を経て1913〔大正2〕年、19歳で陸軍士官学校に入学。1915〔大正4〕年、陸軍士官学校卒業。『生涯と業績』巻末の「関口存男年譜」には、「大正4年5月25日 陸軍士官学校第27期卒業」（『生涯と業績』:503）とあるが、これは正確ではない。確かに同期の他の人たちはこの日に卒業しているが、関口はその日に卒業していない。官報863号（大正4年6月18日付）には「陸軍士官学校第二十七期滞学生徒歩兵第五十七聯隊関口存男ハ本月十五日卒業セリ（陸軍省）」とあり、6月15日付で卒業していることがわかる。「滞学」していたのは、4月25日から6月7日まで肋膜炎により入院をしていたためである。同年12月には陸軍歩兵少尉となるも体を壊し療養に入る。

1916〔大正5〕年、上智大学哲学科に入学。この頃アテネ・フランセに入るが、早くも翌年にはアテネ・フランセ初等科のフランス語、ラテン語の教員になっている。アテネ・フランセに通い始めた時にはすでにドイツ語のみならず、フランス語、ラテン語も人に教えられる程マスターしていたと考えてよいだろう。

関口の日記が残っている。毎日書かれているのではなく、また生涯にわたって揃っているわけではないが、今後発見されるという可能性は残されている。現在確認できているのは、1913〔大正2〕年12月4日～1918〔大正7〕年10月11日、1919〔大正8〕年（5日分）、1920〔大正9〕年（10日分）、1922〔大正11〕年（7月3日付のみ）分で、時期としては、陸軍士官学校入学（大正2年12月）の頃から陸軍士官学校を出て、病氣療養、上智大学入学、そして演劇活動を開始した頃のものである。

上智大学には1916〔大正5〕年10月25日、22歳の時に入学した。当時上智大学をはじめとする私立の高等教育機関は専門学校令による大学で、まだ大学令による大学ではなかった。その時の様子が日記に残されている。

・1916〔大正5〕年（日記データの通し番号〔以下『日記』〕:373）

十月二十一日

上智大学の事を江間から聞いたので、水野繁太郎¹⁸先生の所へ用子を聞きに行く。

水野氏の邸宅は羨しい程新しく美しかった。二階の二室の西洋間も気持よくできてゐた。水野氏は肥えた大きな顔をした紳士振った男であった。そして上智大学へ這入りたいといふ希望に賛成して、来週の月曜日に学校へ来て校長に会って見たらよかろうと言ふ事であった。

十月二十三日

上智大学へ訪れて行って、水野さんに紹介されて校長のホフマン¹⁹氏と話す。氏は私の語学の能力を見て呉れた。そして、本科生として入学する事を許可して呉れた。

¹⁸ 水野繁太郎：上智大学教授 受持学科 独逸語

¹⁹ ヘルマン・ホフマン：上智大学初代学長 受持学科 独逸語・倫理・哲学史

冒頭に出てくる「江間」は、後にドイツ文学者、早稲田大学教授となる友人の江間道助（えま みちすけ 明治 27〔1894〕－昭和 26〔1951〕年）である。関口と同年の江間も陸軍士官学校を出てから早稲田大学に進んでいる。江間との関係について『日本新劇史－新劇貧乏物語－』では、このように記されている。

松永（筆者注：津志馬）、江間（筆者注：道助）、関口の三人は共に幼年学校からの親友であった。松永は幼年学校を、江間は士官学校を、関口は少尉に任官したばかりで病気で軍人をやめたのであった。中でも江間と関口の二人は軍人から独文学の教授になった変り種である。（松本克平 1966:517）

上智大学入学にあたり、関口の語学力（ドイツ語力だけではないだろう）を評価し、入学を認めたのは、上智大学初代学長のヘルマン・ホフマンであった。

上智大学に入った頃に、新劇の劇団「踏路社」の創設メンバーとして演劇活動も開始している。ここでも関口の語学力は威力を発揮している。海外の演劇理論と戯曲に通じていた彼はスタートしたばかりの新しい劇団の頭脳となっていた。ドイツの室内劇運動に範をとるといふ踏路社の方向性は、関口の影響であろう。演劇活動については、「3－1 演劇活動」で詳述したい。

1919〔大正 8〕年 24 歳で上智大学卒業。その後、外務省大臣官房翻訳科物品取扱主任²⁰になっている。詳細は不明。外務省に問い合わせた²¹が、業務の内容まではわかりかねるといふ回答であった。関口は日記に、仕事について以下のように記している。

八月十三日²²から外務省の反訳課につとめてゐる。実に馬鹿げていて 私の観念主義が反抗してしやうがないが、これも一生の経験だ…… とわたしの中の何者かが口添えする。とにかく面白くない。しかし、暁り切ってみて馬鹿になってゐれば何事でもできる。年月の経つ中にはどうにかなるだらう。――また外務省にゐても暇を見ては自分の事ばかりしてゐる。初めの中は、少し外交や政治に関した知識でも得やうかと思つてそんな勉強を仕事の間にやっても見たが、矢張り私は文学者だ。文学者でよろしい。だから此頃は外務省でも文学者としてしか自分で思つてゐない。だから他の人々とは頭っから交際なんぞ開けさうでもなければ、そんなものを開かれては又大変だ。

（『日記』:471）

法政大学での教え子である青木欽次の手記²³には、

²⁰ 『外務省月報』（大正八〔1919〕年九月份）にて確認。辞めた日付のデータは見つかっていない。

²¹ 2018〔平成 30〕年 10 月 29 日、外務省に電話にて問い合わせた。

²² 『外務省月報』（大正八〔1919〕年九月份）によれば、8 月 23 日付で辞令が出ている。日記のこの部分は、10 月 15 日に過去に遡って書いているので、日付を間違つたのかもしれない。

²³ 青木欽次「関口先生の思い出」。青木は、ドイツ語学者青木昌吉の息子で、関口が監修している日光書院刊「独逸語訳注叢書」シリーズにも著書がある。

フランス語で修善寺物語の批評を書かれて、懸賞論文に当選されたとか、外務省でフランス語の翻訳官をなされたとか、又、モリエールの翻訳とか、演劇活動とか、私どもはいつの間にそんなに色々なことをなされたか、ただただ驚くばかりです。

(『生涯と業績』:194-195)

と、フランス語の翻訳官をしていたことが書かれている。

関口の長男の手記には

アテネフランセではフランス語とラテン語を習いましたが、通い始めて一年後には初等科のフランス語とラテン語の先生になっています。また和文仏訳のコンクールに応募し、岡本綺堂の『修善寺物語』の仏訳で賞を得ました。(『随筆集』:7)

ともある。綺堂作品の批評もしくは仏訳は、日本文学の国外への紹介という点でも興味深い、詳細は不明。テキストが現存しているかも確認できていない。

1927〔昭和2〕年に刊行された森田草平・関口存男共訳の『椿姫・タイス』（国民文庫刊行会）の巻頭には、森田による「読者諸氏へ」があるのだが、そこには「私の最も信頼する仏文学者関口存男氏に委嘱」とある。「独文学者」ではなくはっきりと「仏文学者関口存男」と書かれている。翌1928〔昭和3〕年には、関口訳のモリエール『人間嫌い』²⁴（岩波文庫）も刊行されている。法政大学文学部教授になる前の関口は、ドイツ語よりもフランス語で注目されていたのかもしれない。

外務省勤務は長くは続かなかったようで、その時のことについて、長男存哉氏はその手記の中で、「父は上智大学を卒業すると、外務省に勤めましたが、役人の仕事は肌に合わないと言ってすぐに辞めてしまいました。」（『随筆集』:9）と記している。

その後、関口には法政大学での教職の話が出る。そのきっかけとなったのは、野上豊一郎に高いドイツ語力を認められたからであった。『法政大学図書館一〇〇年史：第一編 図書館通史：第五章 戦時体制下の図書館』には、以下のエピソードが掲載されている。

関口^{つぎお}存男（一八九四年―一九五八）は、〔……〕新劇運動にも参加、青山杉作らの踏路社などで活動するうち、同〔筆者注：大正〕十一年、野上豊一郎に語学力を認められ、法政大学予科講師（一九二八年から教授）になる。それは、そのころ築地小劇場が野上豊一郎訳のヴェデキント「春の目覚め」を上演したおり、舞台稽古に時のドイツ大使が立ち会って野上に質問を浴びせ、ドイツ語会話能力のない野上がヘドモドしていたところ、舞台裏で書割の手伝いをしていた関口が出てきて、流暢に通訳してくれたという機縁であった。(飯田泰三 2006:103)

²⁴ 現在、岩波文庫に入っているのは辰野隆記『孤客—ミザントロップ』（岩波書店、1976）である。なぜ関口訳ではなくなったのかは今後調査したい。

この時、野上に認められたことが、法政大学の教員になる「機縁」であったとするならば、これは関口の法政大学講師になる前の出来事でなければならないのだが、この記述には矛盾がある。築地小劇場の創立は1924〔大正13〕年のことであり、関口が法政大学の講師になったのはその2年前の1922〔大正11〕年なのだ。この築地小劇場の公演での関口と野上の出会いが法政大学に勤めることになる機縁になったとは言えない。しかし、このエピソード自体は、1917〔大正6〕年9月の踏路社第3回公演、ヴェデキント「春の目ざめ」（野上白川（豊一郎）訳）の時のことであろう（松本克平 1966:537）。この時の野上と関口の出会いは、後年、関口の法政大学就職という経済的に重要な意味を持ってくるが、関口の日記には記載は見つからなかった。

1922〔大正11〕年27歳、法政大学予科講師となる。

当時から様々な文人、文化人と交流していた。大正末には文芸誌『生命』（使命社）の同人になっている。「生命同人」名簿36名の中には高村光太郎のほか江間道助・舟木重信といった独文学者の名も米川正夫、除村吉太郎、中村白葉らロシア文学関係者の名もある²⁵。後継誌は『主観』（主観社、大正15年5月1日創刊）の由²⁶。

1928〔昭和3〕年34歳、尚文堂よりドイツ語教科書刊行開始。このころから精力的にドイツ語教材を執筆、刊行していくようになる。

1931〔昭和6〕年36歳、尚文堂にて雑誌『初級ドイツ語』を主宰、創刊。

1933〔昭和8〕年38歳、法政大学教授。学生演劇指導の他、舞台演出活動。

『キネマ週報』第155号（キネマ週報社、1933〔昭和8〕年）33頁の「カレッヂシネマ」に、昭和8年5月20日（土）開催の「法政大学映画研究会 創立10週年記念 名映画の集ひ」のお知らせが載っている。プログラム²⁷には、冒頭の挨拶の欄に「映研会長・関口存男」とあるので、この時点で法政大学映画研究会にも関わっていたことがわかる。

さらに、関口の長男の手記には、以下の記述がある。

「法政大学には射撃部がありましたが、父は軍人出身ということで早速その部長になりました。三八銃で、五十点満点のところを四十点前後で撃っていたそうです。」（『随筆集』:11）

法政大学射撃部の部長を務めたことについては未だ確認はとれていない。『法政射撃 創立五十周年記念創刊号』（法政大学体育会 射撃部、1976〔昭和51〕年）には記載がなかった。

この法政大学教員時代にも、関口の卓越したドイツ語力についてのエピソード（澤柳大五郎 1950:107-114）が残っている。同僚である森田草平が当時東北大学で教鞭を執っていた

²⁵ 1926〔大正15〕年7月号掲載のものによる。

²⁶ 大宅壮一文庫創刊号コレクションでは後者の情報のみ。

<https://www.oya-bunko.or.jp/possess/tabid/83/Default.aspx> 〔2021年12月20日閲覧〕

²⁷ 当日のプログラムは以下の通りである。

御挨拶 映研会長・関口存男／O・B 代表 福村穰／映研委員長 川澄邦雄／映画 ひとで／映画 制服の処女／休憩／漫談 中村声波／御挨拶 松竹キネマ蒲田撮影所 俳優数氏出場／映画 東京の女 説明・奈美乃一郎

亡命ユダヤ人のカール・レーヴィット²⁸に手紙を書く際、関口がドイツ語に翻訳した（森田が口述するそばから関口がタイプで打っていった）そうである。便箋数枚にタイプでびっしり書かれたそのドイツ語の手紙を読んだレーヴィットは、これは日本人の手になるものではない、ナチス関係のドイツ人が書いたのではないか、と気味悪く思ったという。このエピソードは、関口の書くドイツ語が、ネイティヴが書いたものと見まごうほど日本人離れしたものであった、ということを示していると言ってよいだろう。

法政大学の教員時代には、いわゆる「法政騒動」の登場人物の一人にもなっている。

1944〔昭和19〕年49歳、法政大学辞職。その後1945〔昭和20〕年まで外務省ドイツ語中等科教官²⁹。

この後、1945〔昭和20〕年、妻籠に疎開することになる。本稿では、この疎開について検討する。

『生涯と業績』の年譜には、関口は「昭和21年3月 慶應外国語学校公職追放により辞職」とあり、おそらくこの記述がソースとなり、関口に関する様々な箇所でもそのように記されてきている。しかし「約二十万名に上る公職追放者名簿」である『公職追放に関する覚書該当者名簿』³⁰には、関口の名を見つけることはできなかった。

1948〔昭和23〕年54歳、疎開先の妻籠から東京に戻る。

1950〔昭和25〕年56歳、高田外国語学校、慶應外国語学校、慶應義塾大学、早稲田大学などでドイツ語教師として教鞭を執る。

1955〔昭和30〕年60歳、NHK ラジオドイツ語講座の講師を務める（逝去まで）。

1958〔昭和33〕年63歳、下落合の自宅にて急逝。

――

1959〔昭和34〕年 荒木茂雄他編『関口存男の生涯と業績』 刊行（三修社）

1960〔昭和35〕年 『冠詞』第1巻 定冠詞篇 刊行（三修社）

1961〔昭和36〕年 『冠詞』第2巻 不定冠詞篇 刊行（三修社）

1962〔昭和37〕年 『冠詞』第3巻 無冠詞篇 刊行（三修社）

1994〔平成6〕年 『関口存男著作集』 全23巻＋別巻 刊行（三修社）

ドイツ語学者としての業績を論じるのは本論の範囲を超えるが、幾つか挙げると・しばしば「関口文法」と称される日本人向けのドイツ語文法記述とそれに基づいた著作を多く刊行した。それはしばしば言語思想にまで踏み込むものであったし、少なくとも言語表現の背後にある発想法を扱おうとするものであった（「論理範疇」「時間範疇」「空間範疇」「感情範疇」の表現法を系統化したならばほとんど完全な教程ができるはずと『独作文教程』『復刊の辞』にある（1953〔昭和28〕年9月30日付け））。また、そこには、新たな見地

²⁸ Karl Löwith：カール・レーヴィット 1897〔明治30〕－1973〔昭和48〕年、ドイツの哲学者。1936〔昭和11〕年から1941〔昭和16〕年まで、東北帝国大学で教鞭を執っていた。哲学とドイツ文学の講座を担当。

²⁹ 『外務省報』第五百四十一号（昭和一九〔1944〕年六月十五日）にて確認。

³⁰ 総理庁官房監査課 編『公職追放に関する覚書該当者名簿』、日比谷政経会、1949〔昭和24〕年。

を開くものもある。たとえば関口が提唱した術語 Konjunktiv II はドイツ本国でも採用されたとも言われている。

・「関口文法」は後代の日本のドイツ語研究、ドイツ語教育に大きな影響を与えた。関口文法研究会、冠詞研究会といった研究会もある。在野の研究者でもたとえば牧野紀之（1939〔昭和 14〕年－）が精力的に取り組んでいる（牧野 1976）³¹。近年でも関口『冠詞』に取り組んだ著作、細谷行輝・山下仁・内堀大地『冠詞の思想—関口存男著『冠詞』と意味形態論への招待—』（三修社、2016）、佐藤清昭『ドイツ語「関口文法」へのいざない 第 1 巻 関口存男の言葉』（三修社、2021）がある。2007 年には、「関口文法と現代言語学」³²というシンポジウムも開催されている。

・他の言語の研究者にも影響を与えた。たとえば、ロシア語学者栗原成郎（1934〔昭和 9〕年－）は関口に高田外語でドイツ語を習っており、影響を受けたことを告白している（栗原 2006）。また、原求作（1954〔昭和 29〕年－）は関口の手法を「まねて」その著作を著した（『ロシア文法の要点』（水声社、1996:8）。Kobayashi(2009) はロシア語教育文法への関口文法の応用の可能性を論じている。

・1994 年には、関口の『意味形態を中心とするドイツ語前置詞の研究』³³（1943）が、2008 年には『独作文教程』³⁴（1959）がドイツ語に訳されドイツで出版されている。

以上が、関口の生涯と業績の概略である。関口にとっても 1930 年代からの経験は、戦中戦後という一つの時代の中に位置づけられるものであり、考察に値する。「人びとの経験は時代の影響を受け、時代の共通性を帯びている」（大門他 2003:3）と考えられるからである。もっとも、個々人は独立した存在であり、関口なりの独自性はあろう。たとえば、彼はドイツ語を大学で講じ、ドイツ語の教材を出版してきたが、シリーズ監修をした書籍の中には、ゲッベルスのテキストを読本³⁵にしたものもある。関口はその意味でも文化国策推進の一員であった。本論文ではそこに迫りたい。疎開までを「前史」とし幼少期から記述した。演劇活動、教員生活については、次の「3. 関口の疎開前史」で個別に述べる。

³¹ 『関口ドイツ語学の研究』（鶏鳴双書 16）鶏鳴出版、1976〔昭和 51〕年。後に増補、牧野紀之編著『関口ドイツ文法』未知谷、2013〔平成 25〕年。

³² 「シンポジウム 関口文法と現代言語学」2007〔平成 19〕年 3 月 22、23 日に浜松医科大学にて開催された。

³³ Tsugio Sekiguchi: *Deutsche Präpositionen. Studien zu ihrer Bedeutungsform* (herausgegeben von Kennosuke Ezawa, Wilfried Kürschner und Isao Suwa), Niemeyer Max Verlag, 1994.

³⁴ Tsugio Sekiguchi: *Synthetische Grammatik des Deutschen, ausgehend vom Japanischen* (Übersetzt von Kennosuke Ezawa), Iudicium Verlag, 2008.

³⁵ 『インテリとは何ぞや?』、独逸語訳註叢書 第 7 編、ゲッベルス著、大野勇二訳註、日光書院、1945〔昭和 15〕年。

3. 関口の疎開前史

3-1 演劇活動

疎開先で関口は地元の人たちに熱心に演劇指導をしている。それは単なる演技術にとどまらず、青年たちの考え方、物事の進め方といったことにも影響を与えていくものであった。それを可能にしたのが、関口の演劇についての深い造詣、自身の青年期における演劇活動、そしてそれを受け入れた妻籠の演劇的素地と若い人たちの熱意であった。

関口の演劇活動について、わかっていることを時系列に見ていきたい。

1916〔大正5〕年10月25日、22歳で上智大学哲学科に入学した関口は、時を同じくして、演劇活動を開始している。劇団「踏路社」の旗揚げである。その当時のことが日記に残されている。

関口日記（『日記』:384）

1916〔大正5〕年

十二月三日。

〔……〕午後三時頃に村田實³⁶さんが来た。そして文学や劇の事に就て熱心に話しかへって行った。劇の事に関して私もすっかり興奮してしまひ、村田さんの真剣な態度に感服した。そして、益々着実な態度で一生の仕事を初めやうと心に誓ったのであった。真剣な態度と、人知れぬ苦心と努力とが芸術の生命である事を深く感じた。

十二月四日。

「ケール³⁷」教授の詩文の講義に初めて出場した。そして放課後話をした。その人は瑞西人で、愉快的気持の好い教授であった。

哲学の講義も段々に佳境に入つて面白くなつて来た。

〔……〕

夜村田實さんが来て、踏路社の劇の計画や私の任務について種々話をした。そして、色々な興味深い雑談をした。

1916〔大正5〕年の12月3、4日あたりの村田とのやりとりが、関口が演劇に真摯に取り組んでいくきっかけとなつたと考えられる。

踏路社発足時の様子について、演劇評論家の大笹吉雄は、以下のように記している。

俳優は村田が岸田辰弥を、青山が夫人を、木村が舞台協会の三井光子を借りてくるというようにそれぞれのつてで集められたが、なお人材不足を補うために、村田が上智大学の学生で、病氣療養中の陸軍少尉関口存男^{つぎお}をつれて来た。後年ドイツ語学者になる関口は、ヨーロッパの演劇運動にも通じていたので、いつしか関口を中心に、ドイツの

³⁶ 村田実（むらた みのる 1894〔明治27〕－1937〔昭和12〕年）俳優、映画監督。関口と同年。

³⁷ ロベルト・ケール 資格・教授 受持学科 独逸語（『上智大学史資料集 第2集』:35頁）

室内劇運動とフランスの親密劇場に範をとって、リアリズムを基調にするという踏路社の方針が固まった。それはまた木村と青山がかねて語り合っていたことでもあった
(大笹吉雄 1985:319; 傍点ふりがなママ)

関口の存在は、この劇団の方針を決める核となっていたことがわかってくる。彼のヨーロッパの演劇に関する知識と見識が草創期の踏路社にとって大きな意味を持っていた。

「踏路社」という名前の由来については、木村修吉郎がエッセイの中で述べていた。

話はどんどんスピーデイに進み、劇団の名もすぐ極まり、出物も決定した。村田は劇団名をその頃有名だった平塚らいちよう女史等の雑誌『青踏社』のやうな名にしたいと云ふ所から、高踏社では何うかと云ふと、一寸首を傾しげてみたので、では踏路社(演劇の本道を踏む)は何うかと云ふと、村田はすぐに賛成した。(木村修吉郎 1946:28)

踏路社は、その後の演劇、映画にも影響を与えていくことになる。関口より4歳年下の演出家、土方与志(ひじかた よし 1898〔明治31〕-1959〔昭和34〕年)は、踏路社の舞台を観て、これを高く評価している。

新劇の創始者というと、文芸協会、自由劇場が挙げられるが、私は、最も芸術的な意義から「とりで社」(大正元年)「踏路社」(大正六年)を逸することはできない。

青山先生は故村田実、関口存男氏らとともにその創立者だった。それは当時において、最も純粋な、演劇創造に良心的な実験的小劇場運動だった。牛込の「芸術倶楽部」での「踏路社」の私演を見ることは、そのころ「新劇ファン」の一人だった私にとって一番大きな感激だった。ほとんど畏敬の心をもって観劇した。特にイプセンの『幽霊』³⁸の演出、その牧師マンデルスを演じられた青山先生の演技の印象は、今なお鮮かにのこっている。青山先生、村田実氏その他この一座の人々はまた映画においても創成期の日本映画のために多くの貢献をされた。(土方与志 1969:386)

これは、青山杉作追悼の文章なのだが、踏路社の業績を記し、そこには関口の名前も挙がっている。

新劇俳優から映画監督になった田中栄三(1886〔明治19〕-1968〔昭和43〕年)も、踏路社について、その著書の中で以下のように評価している。

踏路社は純粋で生一本でひたむきなところが良かった。大正の新劇団の中では、一番小さな劇団だが、一番優れた仕事をした。(田中栄三 1964:69)

³⁸ この踏路社 第5回(1918〔大正7〕年4月)イプセン「幽霊」は関口の演出による。(後述)

踏路社の私演は五回で終わったが、リアリズムの演技の追求に徹していたので、当時の新劇界から高く評価されていた。
(田中栄三 1964:169)

踏路社の第一回私演は 1917〔大正 6〕年 2 月 17, 18 日、長与善郎作「画家とその弟子」であった。プログラムには、演出者 踏路社、舞台監督 黒田次雄³⁹(関口存男)と出ている。日記にはこの時のことが以下のように書かれていた。その年は、1 月 1 日から 2 月 24 日まで多忙により書けず、「概要」として以下のように記している。

踏路社の第一回私演は無事に済んだ。世間の評判もかなり好いし、時事新報に出ている長田秀雄⁴⁰氏の詳しい評も、非常に好意を以て真面目に見てくれた態度が見えて嬉しい。私にも舞台監督としての素地ができたし、種々の好い学問をした。(『日記』:390)

関口はこの時、演劇人としての手応えを感じていたことがわかる。ここに出てくる長田秀雄の評中、関口に関して述べている箇所は以下のとおりである。

この芝居の舞台監督は黒田次雄氏である。この脚本と、一座の俳優たちとに対する氏の深い理解が、芝居全体の後に隠れた力となつて、現はれてゐた。どの幕でも、私は氏の氣息を私の頬に感じた。これは失礼な申し分ではあるが、あまり物質的に恵まれてゐない一座をひきゐて、かう云ふ芝居を作り上げた氏の努力は、見物した人々から感謝されねばならぬものである。
(時事新報 1917〔大正 6〕年 2 月 27 日付)

舞台監督としての関口を認めている評で、これを読んだ関口が喜んだのももっともである。

踏路社の公演を中心に関口の活動を見ていく。

1917〔大正 6〕年 2 月 17 日、23 歳。青山杉作、村田実、木村修吉郎、近藤伊与吉らと踏路社を創立。牛込芸術倶楽部で長与善郎原作の『画家とその弟子』を公演して旗揚げ。公演は、5 回に及ぶ。

第 1 回(2 月)：長与善郎「画家とその弟子」舞台監督 黒田次雄(関口存男)

第 2 回(5 月)：武者小路実篤「悪夢」演出 木村修吉郎

第 3 回(9 月)：ヴェデキント「春の目ざめ」(野上白川(豊一郎)訳)本邦初演
演出 青山杉作

関口は後に野上に招聘され、法政大学の教員になるのだが、出会いはヴェデキント「春の目ざめ」本邦初演のこの時である。プログラムには「近代芸術社主催」と記載されている。

³⁹ 「舞台監督黒田次雄というのが実は病氣休職の陸軍少尉で、上智大学の学生であった関口のペンネームである(彼はこの芸名で時々俳優もやっている)。」(松本克平 1966:508)

⁴⁰ 長田秀雄(ながた ひでお 1885〔明治 18〕年-1949〔昭和 24 年〕年)詩人、劇作家。

近代芸術社の若月紫蘭⁴¹からの野上訳を使って踏路社と近代芸術社の提携でやってほしいという依頼によるものであった。関口は「春の目ざめ」のテキストレジー⁴²を青山に頼まれ、ヴィンクラー⁴³（早稲田大学、慶應義塾大学、法政大学のドイツ語講師）とアテネ・フランセのコット⁴⁴を招いて研究したのだが、その中で、野上の誤訳を指摘していったのだ。野上が関口を高く評価していたことは、後に関口を法政大学に呼んだということからもうかがうことができるだろう。踏路社の木村修吉郎も、戸板康二との対談（戸板康二 1961:91）の中で、「その時関口（存男）の語学に驚きました。」と述べている。

第4回（12月）：ヘッベル「マリヤ・マグダレーナ」（吹田順助訳） 演出 青山杉作

第5回（1918〔大正7〕年4月）：イプセン「幽霊」（森鷗外訳）

関口は、「『幽霊』をやった時、やっと演技監督みたいなことができた⁴⁵」（青山杉作追悼記念刊行会編『青山杉作』〔以下『青山杉作』〕、青山杉作追悼記念刊行会、1957:115）と書いており、演出家としての自信を得たようだ。

第6回：ストリンドベリ「死の舞踏」稽古に入るも公演に至らず

1919〔大正8〕年25歳。

3月 上智大学哲学科卒業 / 8月23日 外務省大臣官房翻訳課物品取扱主任

3月 東京女子大学文学部主催文芸会の演劇で舞台監督をつとめる。

演目『岩長姫』（宮崎ふみ作）、『母』（ストリンドベルヒ作）

この会については東京女子大学の『創立十五年回想録』（1933年）に「舞台監督は関口存男氏。外務省勤務中の氏は夕刻より校舎に来られて熱心に指導された」（209頁）と記されている。しかし、関口の外務省勤務は8月からのようなので主任になる前に既に勤務していたということか、あるいは誤記の可能性もある。

1920〔大正9〕年26歳

6月 創作劇場（飯塚友一郎⁴⁶主宰）第三回公演「指鬘外道」（柳原白蓮 作/邦枝完二 演出）
出演（この時は芸名・関口次雄）於 下谷市村座

⁴¹ 若月紫蘭（わかつき しらん、本名保治 1879〔明治12〕－1962〔昭和37〕年）劇作家、翻訳家、人形浄瑠璃研究家。メーテルリンク「青い鳥」の初翻訳者としても知られる。松本克平（1966:536）も参照。

⁴² (仏) texte régie 脚本を上演できるように台詞の追加、削除したり、演出に合わせて手直ししたりすること。

（参照：<http://www.moon-light.ne.jp/termi-nology/meaning/text.htm> 〔2021年9月1日閲覧〕）

⁴³ Leopold Winkler：レオポルト・ヴィンクラー 1880〔明治13〕－1962〔昭和37〕年、戦前から長く日本でドイツ文化、ドイツ文学、ドイツ語学を指導した。ウィーン生まれのオーストリア人。

（参照：小名木榮三郎「三田の独文－黎明期の星」『慶應義塾大学日吉紀要 ドイツ語学・文学（44）』、慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会、2008:116-107頁。）

⁴⁴ Joseph Cotte：ジョゼフ コット 1875〔明治8〕－1949〔昭和24〕年。アテネ・フランセ創設者。（参照：アテネ・フランセ HP「アテネ・フランセの歴史」<https://athenee.jp/about/history/> 〔2021年9月1日閲覧〕）

⁴⁵ 関口存男「踏路社時代」

⁴⁶ 飯塚友一郎：『農村と演劇』家の光協会、1947〔昭和22〕年再版（1946〔昭和21〕年初版）著者

この時、関口は、「関口次雄」という芸名で、婆羅門役で出演している。ここで演出助手を務めた土方与志にとっては、これが踏路社との初めての仕事であった。

12月24日公開 映画「いくら強情でも」（映画芸術協会製作/国際活映配給）出演

監督・脚本・出演 青山杉作、撮影 酒井健三、撮影助手 友成達雄

出演 吾妻光、近藤伊与吉、押山保明、関口存男

1921〔大正10〕年 27歳 5月13日公開 映画「悲劇になる迄」（松竹キネマ配給）出演

原作：近藤伊与吉 監督：帰山教正 脚色：帰山教正 撮影：船津晴雄 出演 青山杉作、吾妻光、近藤伊与吉

1922〔大正11〕年 28歳 法政大学予科講師 / 新宿区下落合（目白文化村）に転居。

劇作家の岸田國士（1890〔明治23〕－1954〔昭和29〕年）とはこの時親しくなったようだ。岸田は陸士24期。関口の3年先輩で、1924〔大正13〕年に法政大学の講師になっている。関口とは同僚でもあったということになる。二人の交流の様子は、1987〔昭和62〕年刊行の『郊外住宅地の系譜』でも記録されている。

大正末から昭和にかけて、度々、目白文化村を訪れていた文学者がいる。ルナールの翻訳家であり戯曲家としても知られる岸田國士である。岸田は大正一二年南フランスから帰国の後、たびたびこの目白文化村を訪れている。おそらく知人で、しかも同じ大学の同僚でもあった関口存男を訪ねる為であろう。（山口廣 1987:154）

岸田國士は南フランスからの帰国の翌年、大正一三年から法政大学の講師となった。関口在男はドイツ語学校の創設でも知られるドイツ語学の第一人者である。この関口も目白文化村に引越して来た当時はやはり同じく法政大学で教壇に立っていた。遺族の話によれば二人は普段から親しく、岸田がよく関口のお宅を訪れていたという。また関口も演劇に興味を持っていたと言われる。『紙風船』の冒頭に目白文化村が引き合いに出された意味合いもこの辺にあるように思われる。（山口廣 1987:172）

戯曲『紙風船』については後述。1958年の関口逝去後30年弱にして、既に関口の名前「存男」が注で「在男」となっていたり、未だ確認できていない「ドイツ語学校の創設」が書かれていたり（あるいは弥久茂学園高田外語のことか？）、「関口も演劇に興味を持っていたと言われる」というコメントから、本書がドイツ語関係のものではないことを割り引いても、昭和が終わるころには既に関口の名前自体も、演劇活動をしていたことも歴史から消えつつあったのかもしれない。

1930〔昭和5〕年 （35歳）法政大学予科講師になって9年が経っている。

劇団新東京 旗揚げ

第1回公演「フィガロの結婚」関口 脚色/青山 演出 於東京劇場

第2回公演「ルールシーヌ街の惨劇」ラビッシイ原作/関口改修 於歌舞伎座

1931〔昭和6〕年 （36歳）

第13回公演「ドン・ファン」モリエール原作/関口訳補 於新歌舞伎座
1933〔昭和8〕年(38歳) 法政大学文学部教授
1934〔昭和9〕年(39歳)

1月 東山千栄子試演 ジェラルディ作「愛する」 3幕 関口演出 於仁寿講堂
この時の東山千栄子の舞台について、大笹吉雄『日本新劇全史』には、

この後東山は独力で東山千栄子試演会を昭和九年二月に仁寿講堂で開催し、PCL 映画
(注=東宝の前身のひとつの映画会社)で活躍していた丸山定夫や奥村博史らの協力を
得ると、『愛する』(ポール・ジェラルディ作)と『花婿』(ピロオ作)を上演した。
ともに青山杉作の演出だった。(大笹吉雄 2017:235; 注は原文)

とあり、『愛する』と『花婿』のいずれも青山の演出となっているのだが、公演ポスターに
は『愛する』の方は関口演出と明記されている。齟齬があることを指摘しておきたい。

関口は演劇では家族を養っていくのが難しかったので、演劇活動をやめてドイツ語の教
員、研究者になったというのが定説であった。本人も「語学苦心談 わたしはどういう風に
して独逸語をやってきたか？」で、

三十歳になる前頃、演劇での方では到底めしが食えないことがわかり、ついにドイツ
語でめしを食うことに決心した或る日、わたしは此の「句と文章」を中心とした行き
方の一大ドイツ語論を書くことを思い立ち、それからのちは、わたしがその時まで無
意識に機械的にやつていた勉強法を、いよいよ合理化してノートにとることにしまし
た。(『趣味』:330)

と書いている。しかし、実際は、法政大学に勤めるようになり、文学部教授になった後にも、
商業演劇の演出をしている。このことについては長男存哉も以下のように記している。

父は上智大学を卒業すると外務省に勤めましたが、役人の仕事は肌に合わないと言っ
てすぐに辞めてしまいました。一時はその頃始まった映画の監督をして収入を得まし
たが、まもなくその会社が倒産したので全く暮しができなくなりました。

丁度その頃、法政大学の教師の話があり、父は仕方なく大学に移ることになります。
しかし自分の父母の反対によって好きな道に行けなかったのが大変に残念だったよう
です。それで、それからも機会を見ては研究のかたわら演劇をやりました。例えば、劇
団新東京の「ドンファン」、「フィガロの結婚」の上演に協力したほか、法政大学、東
京女子大学の演劇、また疎開した長野県の妻籠で青年の演劇を指導しました。
(『随筆集』:9)

ここには、映画の監督をしたとあるが、その記録はまだ発見できていない。映画出演はし
ていたことがわかっている。出演した映画のタイトルは、前述の「いくら強情でも」(1920

〔大正 9〕年)と「悲劇になる迄」(1921〔大正 10〕年)である。この映画はどのようなものなのか、まだ現物にはたどり着けていない。

踏路社は第 5 回の公演(1918〔大正 7〕年 4 月)を最後に事実上解散しているが、関口が法政大学の予科講師になった 1922〔大正 11〕年に復活を果たしている。

当時の新聞にも、この時のことが記事になっている。

踏路社の復活 大阪京都で公演する

新劇 団の中でも最も古い歴史を有つて居る踏路社は四年以前第五回試演として「幽霊」を上演後頓に沈黙を守つてゐたが村田實君を除く青山杉作、関口存男両君以下の旧同人に新進俳優二十余名を加へ又内部の組織も多少変更して先づ十八十九日大阪中之島公会堂に廿一廿二日京都岡崎公会堂に高倉輝⁴⁷氏作「孔雀城」を上演する、続いて来春は東京に於て第六回公演を行ふ外雑誌部を設けて二月から舞台芸術雑誌「劇」を創刊し又研究部を設けて男女の研究生に正規の課程を授けたり舞台芸術に關しての公開講座を設置する等着々實際運動を進めて居り近日中には仏蘭西第一の劇団テアトル・ヴィユ・コロンビエと通信を開始する筈である斯くて従来の新劇団の興行者を向ふに廻し純粹の新劇を起す為めに努力しようといふ非常な意気込みであると云ふ

(読売新聞 1922〔大正 11〕年 11 月 12 日 朝刊)

この記事にも関口の名は中心人物として挙がっており、また 1922〔大正 11〕年当時、踏路社が新劇の劇団の古参であると認識されていたことがわかる。

木村修吉郎は、後に関口について

〔……〕関口からはハーゲマンの演劇論が紹介され、私達はいろいろ大事な知恵を教え込まれました。この事は後年、青山の演劇精神を形作る一つの大きな要素になったのではないかと思います。第一回私演の長与善郎氏作『画家とその弟子』の演出は関口が演り、それが実に熱心で、しかも玄人も及ばぬ名演出振りで、綿密な分析から全体的な整調、リズムのニュアンスといった要点をよく心得、踏路社がモットーとしていた「リアルに徹する自然法」の演劇を方向付けました。そういう諸点で、関口は日本新劇史の中から、どうしても洩らす事の出来ない存在で、それを記録に残して置くのは、もう今では私より外にはいそうもないので、僅かな余白を借りて、特にそれをここに記して置きたいと思います。

(戸板康二 1961:95)

と語っている。

この発言からもわかるように、関口が演劇活動をしていた期間は極めて短いにもかかわらず、その意義と影響は大きいと思われる。さらなる調査が必要である。

⁴⁷ 高倉輝(たかくら てる 1891〔明治 24〕－1986〔昭和 61〕年)劇作家、小説家、政治家。

3-2 目白文化村

岸田國士は戯曲『紙風船』⁴⁸（1925）で「目白文化村」を登場させている。以下、冒頭の部分の抜粋である。

人物 夫 妻

時 晴れた日曜の午後

所 庭に面した座敷

〔#改ページ〕

夫 （縁側の籐椅子に寄り、新聞を読んでゐる）

「米国フラー建材会社のターナー支配人が一日目白文化村を訪れて、おゝロスアンゼルス（注）の縮図よ！ と申しましたやうに、目白文化村は今日瀟洒たる美しい住宅地になりました」

妻 （縁側近く座蒲団を敷き、編物をしてゐる）なに、それは。

夫 （読み続ける）「四万坪の地区には、整然たる道路、衛生的な下水水道電熱供給装置テニスコート等の設備があり多くの小綺麗なバンガローや荘重なライト式建築、さては、優雅な別荘風の日本建築などが、富士の眺めや樹木に富む高台一帯の晴れやかな環境に包まれて……」（新聞を投げ出し）おい、散歩でもして見るか。

妻 いゝから、川上さんそこへ行つてらつしやいよ。

夫 是非行かなくつてもいゝんだよ。

妻 あたしは、思ひ立つた時すぐでなけれやいやなの。

夫 散歩か。

妻 散歩でもなんでも……。

当時、目白文化村がどのように受け止められていたのかを彷彿させる作品である。前節で目白文化村での関口と岸田との親交について触れたが、関口のこの目白文化村での社会活動も注目に値する。関口は、父存啓、次男存彦とともに、目白文化村の住民組織に積極的に関わっているが、それは妻籠での活動に通じていくものと考えられる。この項では、1922〔大正11〕年以降の関口の生活、目白文化村での町内会活動について述べる。

まずは、目白文化村に転居してきた頃の状況を見ていく。関口が演劇活動を始めた頃、それを容認しなかった父からは仕送りを絶たれ、経済的に苦しくなっていたが、関口が演劇活

⁴⁸ 引用は青空文庫に基づく。

https://www.aozora.gr.jp/cards/001154/files/52082_45850.html 〔2021年9月1日閲覧〕

底本：『岸田國士全集1』岩波書店 1989〔平成元〕年11月8日発行

底本の親本：『昨今横浜異聞』四六書院 1931〔昭和6〕年2月10日発行

初出：『文藝春秋 第三年第五号』 1925〔大正14〕年5月1日発行

動を辞めて「大学の先生になったのをみると早速東京の目白の郊外に土地を買い、洋式の家を建てて与えた」（『随筆集』:9）という。そして数年後には、両親は姫路を引き払い同居することになる。父存啓は教育熱心で、地域社会へも貢献している。姫路では姫路図書館を創設し、館長を務め、東京に移ってからは目白の落合第一小学校の後援会の会長をしたりボールの建設に尽力したりしている。林間学校を企画し、さまざまな分野の人を呼んで話をしてもらったり当時はまだ珍しかった飛行機を見に行ったりなどの催しを計画したそう。存啓自身も話をし、それはなかなか面白く、人気もあった、と関口の長男は回想（『随筆集』:3-4）している。この教育熱心さ、企画力、面白く話す力など、父親から受け継がれたものも多いのではないだろうか。

目白文化村についてその成立過程、生活実態、住民コミュニティー、戦時下の被害、その後の状況について調査検証している野田正穂・中島明子（1991）には、父存啓のことも記述されている。以下抜粋する。

一九二二年（大正一一）に目白文化村が分譲されてから、最初にできた住民組織が「二十日会」である。二十日会という名前は、その名が示すように毎月二〇日に会員が集まることから名付けられている。（野田他 1991:153）

一九二六年（大正一五）の目白文化村地割図には土地購入者一四五世帯の名が載っていて、そのなかで六七世帯に二十日会会員のしるしが付けられている。そして、発会して約一〇年後の一九三二年（昭和七）頃には会員数はすでに一〇〇人をこえている。一九三二年当時の会の役員は会長が在郷海軍少将の勝木源次郎、理事は元台湾銀行総裁の櫻井鐵太郎、退役軍人の関口存哲⁴⁹、そして渡辺明となっている。（野田他 1991:154）

単に自治に関することだけでなく、住民の社交の機会もあったようだ。囲碁、三味線、ビリヤード、映画会、テニスなども行われた。また文化村には多くの学者が住んでいたのも、おのおのの専門分野の講演などもなされ、学術文化的な雰囲気もあった。

関口の父存啓の活躍については、以下のエピソードも紹介されている。

一九三二、三年（昭和七、八）頃、落合第一小学校の校庭をアスファルトにすることになった。このとき、二十日会の理事であり小学校の後援会長でもあった関口存哲⁵⁰が文化村の各家庭を回り、それぞれの家から庭木を小学校に寄付させたという。庭木はアスファルトになった校庭と校舎の間にぐるっと植えられ、品種名を書いたプレートが掛けられたという。文化村の子供たちが全員落合第一小学校に通っていたわけではないのに、このようなことが問題なくおこなわれたのは、どの家も教育に関しては熱心であ

⁴⁹ ここでは、「関口存哲」となっているが、誤植。関口の父、関口存啓のこと。

⁵⁰ 同上。

り、学校に対する寄付には理解があったのだろう。同時に、二十日会の活動に対しても理解を示していたからだと思われる。（野田他 1991:155）

父の存啓は、教育熱心であっただけでなく、行動力、人を説得する力に長けていた。存啓は 1943〔昭和 18〕年 5 月 11 日に死去したが、こういった点も関口に受け継がれている。

野田他（1991:157）には、関口の次男存彦の思い出として、家に森田草平が訪れた時に母親に頼まれて酒を買いに行ったことが書かれている。関口と森田の親しさを示すエピソードである。また「ドイツ語の大学教授の関口存男邸では、学生や外国人、演劇人とのつきあいがあり、応接間だけでは客は入りきらず、茶の間で待機することもあったという。」（野田他 1991:178）とあり、演劇人との関係が続いていたことも記されている。

目白文化村では、その後「若人会」が発足している。この会について、以下に抜粋してみる。

若人会とは一九四二年（昭和一七）の秋に発会した、今でいう青年団のような組織である。会の目的は戦時下における防空と住民同士の親睦であった。（野田他 1991:204）

若人会は防空部と厚生部に分かれていた。防空部が空襲に対する備えを強化し、そして厚生部が防空演習を円滑におこなうために住民の親睦を深めるような活動をし、家の外に出てこない住民たちを外に引き出そうとしたのである。

若人会防空部が独自におこなった防空演習は、きわめて芝居がかったものだったという。わざと大げさに遊び心を取り入れ住民たちを引き出すための工夫をした

（野田他 1991:206）

この「若人会」の中心人物が関口と次男の存彦であった。関口存男が 1942〔昭和 17〕年 11 月 19 日付けで東京市防空講習所の所定の指導科の課程を修了したこと、1943〔昭和 18〕年 5 月 8 日付けで下落合三丁目町会の防空指導員として表彰された記録も残されている。野田他（1991:206）には、若人会の会誌（1942〔昭和 17〕年のもの）が引用されている。そこには隣組親睦会、会員宅での合唱および会の記録映画発表会、ラジオ体操、野球対抗試合、コーラス練習、陸海軍への奉仕活動といった活動記録が掲載されている。この内容は、いかにも関口と次男存彦を彷彿させる。妻籠でもまさにこういった活動をしているのである。

「特別会員であったある会員の父親」が会誌に寄稿したものも載っている。

若い者同士の会、それは結局熱と意気と実行力の凝集でなくては何の役にも立ちません。其れは父兄を動かし、母姉を動かし、全国民を動かす基となります。此の若人会の場合では、若い発瀾たる会員の純真なる行動により父兄を動かしつつある状態にまで進んできている様に思はれます。間違っ居りませうか（野田他 1991:210）

執筆した個人名は載っていないのだが、この会の中心が関口と次男存彦であったことを考えれば、これを書いたのは恐らく関口であろう。この若人会は会長というものを立てず、すべて会員の合議制で進めていたという。会員の中にドイツ人の母親をもつリベラルな考え方の人がいたこともあり、因習にとらわれることなく活動できた様子も書かれている（野田他 1991:165）。

野田他（1991）は若人会の活動に注を付けて、

会の中心者であった関口存彦さんとその父親の存男は、疎開先である木曽の妻籠で戦後まちなみ保存運動が起こった時に、住民の心を一つにして保存運動がスムーズにおこなわれるような活動をした。それはまさに若人会の活動そのもので、その精神は公民館運動へとつながっていったという。（野田他 1991:214）

とある。ここには事実誤認があるので指摘しておきたい。戦後すぐに関口が妻籠にいた時に起こったのが公民館運動であり、町並み保存の運動は 1971〔昭和 46〕年に妻籠を守るための住民憲章が採択されたことによるものである。もっとも関口とともに公民館運動に関わった青年たちが後に壮年になってこの町並み保存運動に参画しており、これにも関口の影響が及んでいるのは確かである。

大戦末期の状況については、以下のような記述がある。

目白文化村では三月一〇日の空襲をきっかけに疎開の準備をした人たちが多い。学者の家では、疎開先にたくさんの蔵書や原稿を送るのにずいぶん苦労したという。

「父は何よりも先に自分の原稿を送りました」。「父親に『もし空襲で火事になったら、この論文の入った行李だけは助けてくれ』といわれました」。「大世帯が二〇年あまり住みつづけた家の家財は大変な量でした。父が学者であったために本が多く、それだけでもりんご箱五〇箱になりました。当時はトラックはもとより馬車もなく、牛車で目白駅まで運びました」。（野田他 1991:194）

この発言者の情報は載っていないのだが、恐らく長男存哉であろう。その根拠となるのは、存哉の書いた以下の文章である。比較してみればそれは明らかである。

終戦の年、二月に父母は着のみ着のままで長野県妻籠に疎開しました。結婚したばかりの私ども夫婦と次男の存彦が後に残りましたが、存彦は出征し、夫婦で家中の荷物の荷造りをしました。荷物が運送屋さんの牛車で目白駅に運ばれた四月十三日のその晩に大空襲があり、家は全焼し付近一帯が焼け野原になりました。ところが目白駅で例の文例集の荷物だけが積み残しになり、そのほかの荷が妻籠に届いたのです。着いた荷の中に文例集が無いので父は文例集が焼けたと思い、これで一生をかけた研究がふいになったと落胆したようです。実際は運送屋さんが残った文例集の荷を自分の家に持って

帰りました。そしてそのあと数日後に妻籠へ送ってくれました。その運送屋さんの家は私の家の近くにありましたが、その一角だけは僥倖にも焼けなかったのです。

(『随筆集』:15)

この時の妻籠での関口の様子については、筆者は長男の存哉、次男の存彦から、人生をかけて書き続けてきた文例集が焼けてしまった、と思った関口は裏山に登りぼんやり座り込んでしまった、という話を聞いている(1993〔平成5〕年、筆者との面談)。

積み残されてしまった荷物をもし運送業者が、存哉宅に返してしまっていたら焼失は免れなかった。荷物を業者が自宅に持ち帰ってくれたこと、その運送屋の家が焼けなかったこと、といういくつかの偶然が重なり、奇跡のように関口の文例集は生き延びることができたのだ。

敗戦の5か月前、1945〔昭和20〕年3月末に関口は目白文化村の自宅を出て疎開先の妻籠に向かうことになる。

3-3 法政大学での活動

関口は、1922〔大正11〕年⁵¹4月に法政大学予科講師になっている。1925〔大正14〕年9月の『法政大学報』によれば、大学部ではドイツ語学、ドイツ文学演習、古典語を、予科ではドイツ語を担当していたとある。予科講師になって遅くとも3年後には、大学部でも授業を担当していたことがわかる。

法政大学に残されている資料から、関口に関する情報を抜粋してみたい。主として課外の講演活動や当該年度の担当科目、夏期外国語講習の担当教科などである。講演会や公開講座のタイトルを見ると、「戯曲の本道と邪道」、「独逸語と独逸文学」、「劇の技巧と群衆心理」など非常に興味深いのが、現在、残念ながらその内容についてはわかっていない。

『法政大学報』

創刊号 大正12年3月

文藝思潮講演会 第8回 2月10日 関口存男「戯曲の本道と邪道」

第3号 大正14年5月

担当 水曜1限(8-10時) 独文学演習

土曜3限(13-15時) 独語学

第8号 大正14年9月

担当 大学部 文学科、哲学科 独語学、独文学演習、古典語 関口存男

大学予科 独逸語 関口存男

第4巻第5号 大正15年5月号

学部および専門部一部授業時間表

月曜3限 独文学演習

⁵¹ 『法政大学史資料集 第14集』 法政大学、1991〔平成3〕年:78頁参照。

- 火曜 3 限 独語学
- 第 5 卷 2 号 昭和 2 年 2 月号
- 「雑報」法政大学独逸語会例会記 独逸語原語演劇 関口存男が指導
 演目 Ludwig Anzengruber⁵² “Die Kreuzelschreiber⁵³”
- 第 5 卷 4 号 昭和 2 年 4 月号
- 法文学部文学科 荒木茂雄⁵⁴ 福島 卒業
- 第 5 卷 5 号 昭和 2 年 5 月号
- 文学部時間表 火曜 3 限 独語学
 木曜 1 限 独文学演習
- 第 6 卷 5 号 昭和 3 年 5 月号
- 時間表 水曜 3 限 独文学演習
- 第 6 卷 6 号 昭和 3 年 6 月号 法政大学創立五十周年記念号
- 記念式典余興
- 独語劇 法大独逸語会 ユーリビデス作「アルケステイス」演面⁵⁵関口存男
 邦語劇 法大演劇研究会 クルトリース⁵⁶原作 「パタン君」演出関口存男
- 第 6 卷 9 号 昭和 3 年 10 月号
- 本年度科目配当担任教員一覧
- 文学科、哲学科 独文学演習、独語学、ラテン語 関口存男
- 大学予科 独逸語 関口存男
- 第 7 卷 5 号 昭和 4 年 5 月号
- 大学予科級主任 一部二年 各学年 G 組 関口存男
- 学部および専門部一部授業時間表
- 水曜 3 限 独語学
 土曜 3 限 ラテン語
- 第 7 卷 6 号 昭和 4 年 6 月号
- 文学部講演会 5 月 16 日午後 6 時半より朝日講堂に於て
 「独逸語と独逸文学」本学部 同予科教授 関口存男
- 第 7 卷 7 号 昭和 4 年 7 月号
- 外国語夏期講習会 第一部（独逸語）／第三部（ギリシャ語およびラテン語） 関口存男
- 第 8 卷 6 号 昭和 5 年 6 月号
- 大学予科主任教授嘱託 一部二部 GI 組 関口教授
- 第 8 卷 7 号 昭和 5 年 7 月号

⁵² ルートヴィヒ・アンツェングルーバー（1839〔天保 10〕－1889〔明治 22〕年） オーストリアの劇作家、小説家。

⁵³ 1874〔明治 7〕年にアン・デア・ウィーン劇場で上演された作品。

⁵⁴ 荒木は後に関口主宰のドイツ語学習雑誌の同人、1929〔昭和 4〕年より法政大学教員となっている。

⁵⁵ 演出の誤植か。

⁵⁶ フランスの劇作家 Georges Courteline（1858〔安政 5〕－1929〔昭和 4〕年）か。

外国語夏期講習会 7月15日より8月6日まで日曜を除き20日間

独逸語 関口存男

第8巻9号 昭和5年10月号

法政大学文学部 特別公開講義

第一学期 語学演習 ラオコオン訳読 関口存男

第二学期以降「劇の技巧と群衆心理」関口存男

第9巻7号 昭和6年7月号

外国語夏期講習会 独逸語 関口存男

第9巻8号 昭和6年9月号

本年度学科担任表

文学部 独語学及文法、ラテン語 関口存男

哲学科 独語学、ラテン学 関口存男

予科 独逸語 関口存男

第10巻6号 昭和7年6月号

本年度学科担任表

文学部 独語学及文法、ラテン語 関口存男

第11巻4号 昭和8年4月号

文学部教授委嘱 文学部講師関口存男氏は文学部教授を委嘱せらる。

第11巻6号 昭和8年6月号

本年度学科担任表

文学部 独語学及文法、古典語、独文学

第12巻6号 昭和9年6月号

本年度学科担任表

文学部 独語学及文法、古典語、独文学

予科 独逸語

第12巻7・8号 昭和9年7・8月号

外国語講習会

独逸文學 7月11日－7月24日 午前7・30－10・00

関口存男 ドイツ戯曲論

ドイツ語 7月11日－7月31日 午前7・30－9・50

高級 最も難解なる独逸の戯曲、小説、論文の三科に分つて之が平明なる訳読講義を行ふ

関口存男 G. Hauptmann⁵⁷: Kollege Crampton (プリント)

第12巻11月号 昭和9年11月

森田草平氏送別会

10月7日(日) 品川八ツ山下弁慶にて開催。関口存男 惜別の辞

第13巻6号 昭和10年6月

⁵⁷ Gerhart Hauptmann (1862〔文久2〕－1946〔昭和21〕年) ドイツの劇作家、小説家。

本年度学科担任表

文学部 独語学及文法、古典語、独文学、文学各論、独文学演習

大学予科 独語

第 13 卷 11 号 昭和 10 年 11 月

「関口存男教授論」田村生

昭和 11 年 6 月

本年度学科担任

文学部 独文学演習、ラテン語、独文学

予科 独語

昭和 12 年 1 月

法政文学振興会 12 月 12 日 出席

昭和 12 年 6 月

本年度学科担任

文学部 独文学演習、古典語、独文学

昭和 12 年 7・8 月

夏期講習会

ドイツ語初級 7 月 13 日－31 日 関口存男

テキスト 関口著 標準独逸文法、教材プリント

昭和 13 年 5・6 月

本年度学科担任

文学部 独文学演習、独文学 関口存男

予科 独逸語

昭和 14 年 6 月

本年度学科担任

文学部 独文学演習、独文学 関口存男

昭和 16 年 9 月

本年度学科担任

文学部 独文学演習、独文学 関口存男

『法政』大正 12 年 7 月 法政大学学友会

法政大学演劇部報 （関口の名前は出ていないが、関わっていたらと推測される。）

独語劇「アウエルバハの酒窟」（ゲーテ「ファウスト」）一幕

法政大学独逸語会報 79 頁

演劇会に独語劇を大正十年来上演して来た人々の集団にブリムボリウム⁵⁸といふ名をつけてみたら、独逸語会に成つて了まつた。其処でお互ひに仲良く勉強して、第一回の例会を大正十二年一月二十七日に講堂で開催したらあの水色の講堂が真黒になつて、其の中で「旨

⁵⁸ Brimborium *n.* （話）から騒ぎ；おしゃべり

い」といふ声がした。やつと後始末が済んで、皆がにこにこして集まったら皆の親父が拙いと云つた其の時の出し物は、

一、天上の序詞（ゲーテ、ファウスト）一幕

二、アルトハイデルベルヒ（フェルステル）一幕

三、熊（チエホフ）一幕

で、音楽は戸山の赤い小父さんたちに頼んだのだが——そこで皆は黙つて、顔を見合わせた
が、また仲良く三十箇の頭をそろへて勉強し始めた。—毎年演劇会には独語劇を出す、輪講
もやる、会話もやる、何でも真面目に熱心にやる、ただ喧嘩はしない。（二三、五、十四）
（原田義繁）

第4号（昭和2年3月）

法政大学独逸語会会報 163 頁-

大正14年度会報

本年度及び十五年度に於ける我が独逸語会の活躍は、実に過去の栄光ある歴史を凌ぐ目
覚ましいものがあつた。

新学期が始まると、先づ会則に定められた毎週の講座二組を設け、昼の休憩時を利用して
相互に独逸語の力を助け合ふことにした。

講座第一部 レッシング作・エミリア・ガロツティ⁵⁹（5幕）

講座第二部 グリムのメールヘエン

第一部は関口先生、第二部は内田、多田⁶⁰の両先生が指導の任に当つて下さった。

第二学期の始めに、本会の事業の一なる独逸語演劇の話が出て関口先生が演出、監督の任
に当つ下さることを快諾せられたので、大正十二年二月以来公演しなかった独逸語劇を、
愈々実演することに決定し、早速その稽古及び準備に取りかかった。凡べては着々と進んで、
十一月二十三日（新嘗祭）を選んで遂に左の如き番組で本大学講堂に開演することが出来た。

法政大学独逸語会第二回例会番組 〔……〕

ドイツ文学、ドイツ語学以外に、ラテン語を担当している。実際、どのような教材を使い、
どのような内容であったのかまではわかっていない。今後、受講者による記録なども見つけ
たいと思っている。講演会、指導した演劇、サークル活動のことなど、大学における関口の
業績については、さらに調査が必要である。

⁵⁹ 関口存男訳が刊行されている。「エミリア・ガロツティ」、『世界戯曲全集 第12巻』世界戯曲全集刊
行会、1928〔昭和3〕年：131-212頁。

⁶⁰ 多田 基（ただ もとい 1901〔明治34〕—1995〔平成7〕年）日本の経済学者。この時、ドイツ語担当
講師。内田百間の教え子でもある。

3-4 法政騒動⁶¹

関口が関わった事柄として、所謂「法政騒動」を無視することはできないだろう。しかし、現在伝わっている内容については、正確かどうか疑問に思われる箇所、あるいは一面的な見方も散見される。例えば、このようなことが言われている。

- ・ 関口がそそのかした。
- ・ 関口が森田草平を担ぎ出して大騒動になった。
- ・ 森田（関口）派が、学生を動員して騒擾。
- ・ 「一言で言うと、夏目漱石門下が集まっていた法政大学で、その門下の作家どうしの対立があり、森田草平が学内の権力を握ろうと画策して百閒を追い出したのでした。それが「法政騒動」と言われた事件です。」⁶²
- ・ 予科のドイツ語教員であった関口と内田の人間的対立⁶³。

不正確なまま、これが「史実」として伝わってしまうことは遺憾であり、法政騒動については、一度整理し補うべきこともあるかもしれない。

まずは時系列でなりゆきを追ってみたい。騒動の始まりは、松室致法政大学学長の急逝、1931〔昭和6〕年のことである。

1931〔昭和6〕年

2月 松室致法政大学学長の急逝

「リベラルな独裁者」。校舎新築、専任教員化などによる巨額の借財

3月 秋山雅之介が学長事務取扱に就任。合議制で学長ポストは空位。のちに学長となる。

秋山は岡村玉造(校友)を事務総長に起用 抜本的財政整理を断行。

教職員俸給一律二割減など

9月 平貞蔵ら経済学部教授会から「学校改革」の機運、岡村への反感

→理事会解散と教授陣による再組織を野上豊一郎にもちかけるも不調

→森田草平の野上排斥運動に合流

⁶¹ 主な参考文献

・ 飯田泰三「第一編 図書館通史:第五章 戦時体制下の図書館」、『法政大学図書館一〇〇年史』（法政大学図書館、2006〔平成18〕年）87-124頁のうち95-120頁。

・ 宮永孝「昭和八、九年の『法政騒動』」、『社会志林』59巻4号、法政大学社会学部学会、2013〔平成25〕:200-179頁

このほか、同僚であった田中美知太郎も田中（1984）で記録している。また、野上彌生子の『日記』、短編『小鬼の歌』、佐藤春夫『如是我聞 法政騒動真相実録』も事情を伝えている。

⁶² 田中優子「総長から皆さんへ 第14信」法政大学ホームページ 2020年7月20日
<https://www.hosei.ac.jp/pickup/article-20200716140218/> [2021年6月7日閲覧]

⁶³ 法政大学学内学生向け動画中。このほか関口と会ったあるユダヤ系ドイツ人が、関口があまりにも完璧なドイツ語を話し、書くので、ナチスのスパイではないかと恐れたというエピソードが語られている由。このユダヤ系ドイツ人はカール・レーヴィット のことと推測されるが、関口はレーヴィットと会っていない。この逸話は、森田草平のレーヴィット宛の手紙を代筆した時のことであろう。

1932〔昭和7〕年

10月 経済学部で問題再燃、予科と文学部の「反野上熱」と連動

→野上に辞職勧告するも、「岡村を抑えられるのは自分しかいない」と拒絶される

1933〔昭和8〕年

3月 文学部独文科と予科における関口存男と内田栄造（百閒）の確執

森田派と野上派の全面対立

予科ドイツ語部主任関口存男は、内田のコマをすべて削る提案

9月 平貞蔵、名原広三郎の解雇。野上退陣を求める全学ストライキ

11月 藤田栄ら、学生を煽動。森田らは野上に予科長だけでも退任を、と求めるも不調

12月 野上の解職、野上派47名辞職。（翌年には森田も解職）

荒木貞夫（陸軍軍人。陸士9期）、法政大学顧問に就任。軍国色の強い学風へ。

この背後には、優秀な法政出身者が母校の教員として採用されるべきだ、という「法政ナショナリズム」があり、野上の「帝大植民地的」人事への不満があった。

関口は、陸士27期で、大先輩にあたるこの荒木のことをどう見ていたのかは気になるところである。

法政騒動は、このように追ってくると、帝大派（野上派）の復活を利用して、革新派（森田は失脚）には実権を握らせず、結果として非教員である校友理事が漁夫の利を得たという構図が見えてくる。どのような立場の人が語っているのかによって見え方も違ってくるのは確かである。これも一面的な見方ということになるのかもしれないが、関口 vs. 内田、森田 vs. 野上、と単純化してしまうのは史実から離れてしまう危険がある。

『帝都大学評判記』（大村八郎 著、1934〔昭和9〕年、三友堂書店）でも、法政騒動はセンセーショナルに取り上げられている。この「大村八郎」は、実は法政大学予科の教授太田悌蔵⁶⁴のペンネーム（飯田泰三 2006:102-103）である。本書で取り上げられている大学は、早稲田、慶應、明治、日本、立教、法政（掲載順）。「法政大学の巻」の章タイトルは以下のとおりである。

新興の大学法政

法政大学の陣容

秋山学長とデモクラシー

法政大学の財政状態

法政大学のお家騒動

関口存男氏の争奪戦

森田・関口両氏の提携

関口存男氏の策略

⁶⁴ 太田悌蔵（おおた ていぞう 1900〔明治33〕－1976〔昭和51〕年）。「法政騒動」当時、高等師範科で哲学を、予科で修身を担当していた。

関口氏の打った芝居
平教授と高山教授
一大ストライキ
教授・講師三十六氏の解雇
騒動の結末
今後の予想

本書の刊行が法政騒動の翌年ということもあり、また、著者が学内の人間ということもあり、内容は法政騒動一色である。就中、関口を中心に取り上げているということは、いかに関口がこの騒動の中で目立っていたか、ということを表していると思われる。

4. 関口の妻籠疎開

4-1 なぜ妻籠に向かったのか

1945〔昭和20〕年3月、東京から多くの学術出版関係者が妻籠に疎開した。関口も、この土地ゆかりの社会活動家勝野金政（1901〔明治34〕－1984〔昭和59〕年）と社会学者であり日光書院の発行者でもある米林富男（1905〔明治38〕－1968〔昭和43〕年）に勧められ、妻籠に赴くことになる。関口は日光書院に著者として関わっていたのである。関口家からは妻と次男を帯同し、長男夫妻は東京に残った。妻籠に疎開した人たちの顔ぶれは、荒木茂雄（法政での関口の教え子。ドイツ語学者）、桜井庄太郎（社会教育学者）、木下孝則・義謙兄弟（画家）、桐島龍太郎（吾妻書房社長。三菱財閥重役）、下山家（初代国鉄総裁の一族）らであった。

関口と米林は1948〔昭和23〕年の暮れまで妻籠に残る。彼らは公民館運動（1946〔昭和21〕年7月5日文部次官通牒から）を盛り上げ、民主化運動を進めていった。1946年〔昭和21〕年10月には妻籠公民館を設立⁶⁵、翌1947〔昭和22〕年には、その活動が認められ、全国初の文部大臣賞を受賞している（『南木曾町誌通史編』:932、後述）。米林は村の実態調査を、関口は家を「公民館文化部」とし、初級英語講座などさまざまな学習講座、関口と米林を訪ねてやってくる学者や演劇関係者による講座の開催、演劇グループによる上演などを行った。この時の演劇活動をした人々が中心となって公民館活動はその後も続けられ、昭和40年代の町並み保存運動につながっていった。

1948〔昭和23〕年に帰京し、爾後、ドイツ語教師として活動していくことになる。帰京後の1948〔昭和23〕年12月の勝野金政宛関口書簡⁶⁶では妻籠時代を「夢の様な三年八ヶ月でしたが、ほんとうに龍宮から出て来た浦島太郎の様な気がします。」と振り返っているが、果たして実際の疎開先での生活はどのようなものであったのだろうか。関口が帰京した後も疎開先と関わり続けた形跡は今のところ見つかっていない。

⁶⁵ 「妻籠公民館々則」は1946〔昭和21〕年9月8日付。遠山(2004)は、これをもって開設は9月としている（後述）。

⁶⁶ 勝野金政親族所蔵。

まとめれば、他の多くの文化人同様に関口も疎開を余儀なくされ、知人の伝手でたまたま妻籠に行くことになり、幸いにも現地側の素地もあって自身の持つ演劇や語学の知識がその地で活かされ、戦後もその地に続く遺産となった。但し、疎開体験が関口自身の学問に痕跡を残すことはなかった、ということになる。しかし、そのような偶然だけが関口の疎開ではなかった。国策ともいえる要因があったと考えられるのである。そもそも、関口はなぜ疎開したのか、なぜ妻籠だったのか、疎開先妻籠で何をして、何を残したのか。まずは妻籠について、そして関口が疎開に至る経緯を検討したい。

4-1-1 妻籠と公民館

関口が疎開した妻籠は現在の長野県木曽郡南木曽町である。南木曽町は長野県の南西部に位置している。1874〔明治7〕年11月7日に筑摩県筑摩郡妻籠村と蘭村が合併して吾妻村となり、1876〔明治9〕年8月21日より長野県の所属となっている。1961〔昭和36〕年4月1日に吾妻村は読書村・田立村と合併して南木曽町が発足した。

中山道69次のうち江戸から数えて42番目にあたる妻籠宿は、中山道と伊那街道が交叉するところで、古くから交通の要衝であった。妻籠には、中央の文化が運ばれてきて、独自にそれを消化した宿場文化（小林俊彦1971:35）とも言えるものがあつた。

関口が疎開した当時の妻籠は、地域の9割は山林（『南木曽町誌 資料編』〔以下『町誌資料編』〕1982:620-621）で、しかもその8割は御料林（国有林）であつたため、御料林関連の仕事か出稼ぎで生活する者が大部分であつた。耕作できる土地はわずかで、有効活用は難しいという状況で「典型的な貧しい農山村部落」（勝野時雄1966:88-94）であつた。

南木曽町役場所蔵の「経済更生特別助成村吾妻村・昭和十五年度経済更生計画及びその実行費調書」（『町誌資料編』1982:620）には当時の村の「欠陥・長所」が挙げられている。

（イ）欠陥

1 本村は木曽谷の峡谷に位する山村にして、四囲山を巡らし面積五方里ありと雖も、その約九割即ち五、四二〇町歩は御料林にして山稼^{ヤマカ}を以って生活をなすもの大部分なり、従つて本村民は山を見乍らにして薪炭さえ不足を來たし、加うるに耕地面積は田一、〇〇八反・畑七八〇反の僅少にして、而も階段状なるを以って労力の有効的利用に乏しく、且つ、地力劣る、

2 交換部門多く、自給部門極めて僅少なるを以って、農業経営に弾力性を欠く、
〔……〕

（ロ）長所

1 志操温健にして相互扶助の念篤く、村民融和し、理否を良く弁え事に処するの長所あり、
〔……〕

1945〔昭和 20〕年の春、このようなゆとりのない状態の村に東京から 10 家族以上疎開してきたのだ。歓迎されたとは考えにくい。しかし、「志操温健にして相互扶助の念篤」い村民性が戦時ということで疎開者たちを受け入れたのだろう。

帰京直後の 1948〔昭和 23〕年 12 月に書かれた関口の勝野金政宛の手紙には、
「本当に他の疎開者達にはすまないような気のする程愉快的、我儘の仕放題の、実に悠々たる疎開をさせて頂いた事を衷心感謝します」
とあるのだが、実際にはそのようなすばらしいばかりの疎開生活ではなかったようだ。決して裕福ではなく余裕もなかったであろう妻籠の人たちの疎開者の団体に対する処遇は冷たいものであった、と勝野時雄⁶⁷は書き記している（勝野時雄 1966:90）。この時妻籠の人々と疎開者たちを結びつけるはたらきをしたのが、1946〔昭和 21〕年 5 月に復員し、村役場の書記を務めていた勝野時雄であった。勝野には、御料林問題に関して村民をまとめる必要があり、そこに時を同じくして公民館設立の話が出たのである。

日本における公民館の設立は、1946〔昭和 21〕年 7 月 5 日付け、各地方長官あての文部次官通牒「公民館の設置運営について」が始まりとされる。以下、引用⁶⁸する。

公民館の設置運営について

昭和 21 年 7 月 5 日 発社第 122 号
各地方長官あて 文部次官

国民の教養を高めて、道徳的知識的並に政治的水準を引上げ、または町村自治体に民主主義の実際的訓練を与えると共に科学思想を普及し平和産業を振興する基を築くことは、新日本建設の為に最も重要な課題と考えられるが、此の要請に応ずるために地方において社会教育の中樞機関としての郷土図書館、公会堂、町村民集会所等の設置計画が進捗し其の実現を見つゝあるのも少なくない事はまことに欣ばしいことである。よって本省に於ても此の種の計画が全国各町村の自発的な創意努力によって、益々力強く推進されることを希望し、今般凡そ別紙要綱に基く町村公民館の設置を奨励することになったから、青年学校の運営と併行して適切な指導奨励を加えられる様、命に依って通牒する。

⁶⁷ 勝野時雄については詳しい情報がないが、『月刊社会教育』第 13 巻 2 号（通算 135）（1969〔昭和 44〕年 2 月）に追悼記事が掲載されている。福尾武彦「勝野時雄氏の死を悼む」（福尾 1969）および松浦万理子（淑徳大学 3 年生）「勝野先生をしのぶ」（同所:49）である。これらによれば、1968〔昭和〕43 年 12 月没、享年 53。時雄は、妻籠での公民館運動の後、米林に前後して上京し、定時制高校につとめながら、1959〔昭和 34〕年の社会教育法の改正以降、千葉大学で非常勤講師として社会教育行政法を講じ、淑徳大学（千葉）で社会教育者として尽力した由。淑徳大学の開学は 1965〔昭和 40〕年で、一期生から関わっていたと思われる。福尾の記事には時雄の死は「本年〔昭和 44 年〕三月ようやくその手塩にかけた第一回の卒業生が出る時でもありました」（福尾 1969:48）とある。1968 年に 53 歳ならば、公民館表彰された 1947〔昭和 22〕年は 32 歳か。

⁶⁸ 国立教育政策研究所サイト内、「令和元年度 公民館に関する基礎資料」83 頁。
https://www.nier.go.jp/jissen/book/r01/pdf/com_center_base_all.pdf〔2021 年 12 月 20 日閲覧〕

尚本件については内務省、大蔵省、商工省、農林省及厚生省に於て了解済であることを附記する。

これに続く「1 公民館の趣旨及目的」には、

これからの日本に最も大切なことは、すべての国民が豊かな文化的教養を身につけ、他人に頼らず自主的に物を考え平和的協力的に行動する習性を養うことである。そして之を基礎として盛んに平和的産業を興し、新しい民主日本に生れ変ることである。

とあり、公民館はこのための文化教養の機関である、と位置づけられている。公民館研究の小林文人によれば、「公民館構想はむしろ極めて日本的土着的性格の強いものであった」(小林文人 1986: 4-5)。

妻籠公民館設立のきっかけは、「文部省の通牒があったため、それを受けたもの」ということだけではなかった。「御料林」問題がたちはだかっている時である。皇室財産であった御料林が国有になるにあたり、村民の関心はかつて強制的に取り上げられた山林を奪回することにあった。生活を安定させるためには山林の解放が必要であったのだ。この時、村の御料林に関する運動の組織と推進を任されたのが勝野時雄であった。彼は、行政に対する不満が表面化してきた住民たちと行政当局をいかに結びつけるかに腐心していた。そんな時「たまたまその頃、文部省は、公民館設置についての通牒を出して」(勝野時雄 1966: 89)いたため、この公民館設置の動きを御料林解放運動の組織化に利用し、「村民の批判や不満を汲みあげるパイプ」としたのであった。このようなきっかけで始まったため、妻籠における公民館設置の動きは、文部省通牒の「公民館の趣旨及目的」にある「町村民が打ち集って談論し読書し、生活上産業上の指導を受けお互いの交友を深める場所」といった施設としての公民館をつくろうというようなのんびりしたことではなく、まさしく「運動」そのものであった。(以上、勝野時雄 1966: 88-94)

この公民館の誕生にあたっては、その時妻籠に疎開していた二人の文化人の存在を欠かすことはできない。それが関口存男と次項で紹介する米林富男⁶⁹である。関口が指導をした演劇活動に参加した人たちは、妻籠公民館立ち上げに関わっていく。

公民館設立の経緯については遠山高志(2014)に詳しい(当時、南木曾町博物館館長)。すなわち、1946〔昭和 21〕年 7 月 5 日に公民館設置の文部次官通牒が出て、同年 9 月 8 日に「妻籠公民館々則」⁷⁰が制定された。遠山はこれをもって妻籠が日本初の公民館とするのだ

⁶⁹ 米林には公民館活動に対する別の意図や認識があったかもしれない。福尾武彦は、勝野時雄の追悼文の中で、「米林さんたちが公民館活動をやるのは、『一日も早く占領軍に帰ってもらうためだ』といわれ、独立の問題と結びつけて公民館をとらえていたことを戦後史で知り、その卓見に驚かされたものでした。」(福尾 1969:48)としている。米林自身その後も成人教育や公民館を論じ続けている。米林(1959)では「成人の盲点と焦点」の題目で日本における社会教育のむずかしさを述べ、米林(1964)では「地域開発と公民館」を論じている。

⁷⁰ この館則の存在を指摘したのは佐藤一子と新藤浩伸の由(遠山 2014:29)。

が⁷¹、ここには米林富男が関わっていた。文部次官通牒の第5条「在村文化人をして顧問を委嘱することができる」が妻籠の特色だという（遠山 2014:23, 25）。公民館設置指令を受けた当時の木曾地方事務所長が、妻籠に関口や米林といった疎開文化人がいるということで村に指示したというのである（遠山 2014:27）。遠山も引用しているが（遠山 2014:27）、勝野金政も「今日の妻籠」で以下のように書いている。

此の当時、木曾福島には原崎という地方事務所長が任命されて来て、終戦後中央の命により、妻籠に文化人が集団的に疎開しているという事で、日本に初めての公民館を設けその運動を指示した事で何分にも公民運動に経験を持たない役場当局者は大変困惑したとの事である。
（『勝野金政手記』1982:17-18）

役場当局者は困惑したが、文化人は既に妻籠にいた。公民館設立に関口達の存在は大きかったのである。

実際、村の若者は関口達と交流した。遠山が示しているのは、妻籠の古畑和一（1925〔大正 14〕年 11 月 14 日生、当時 22 歳か）の 1946〔昭和 21〕年の記録『備忘録』である（遠山 2014:25）。それによれば、古畑は、関口の次男存彦（1924〔大正 13〕年生）とともに米林を訪れたり、関口存男の話を聴講したりしている。このほか、早稲田大学芸術科の学生が来村して劇を上演したことも記録されている。

妻籠公民館では演劇活動と社会調査が活動の 2 つの柱だったが、〔昭和 21 年 9 月の〕発足当初から早稲田大学の演劇関係者との交流をもったり、村長選挙や御料林問題についての村民大会の開催などを活発に推進していったことが〔古畑の〕日記からもうかがえる。
（遠山 2014:26）

なお、関口存男次男の存彦は当時、早稲田大学学生。コーラスをやっており、妻籠では、青年達にコーラスの指導を始めたことも別途、記録されている（『随筆集』:15）。存彦は存男と妻籠を繋ぐ者として重要である。

また、当時の人々、特に青年達の活動をあらわす刊行物に『よみかき』『妻籠青年団報』『南木曾岳』『妻籠公民館資料』といったものがある（『南木曾の歴史』:72）。また、文集などがあるが未見（中田（1985）などでは言及されている）。いずれも調査・考察が必要である。

妻籠公民館は 1947〔昭和 22〕年に文部省表彰を受け、注目を浴びることになる。まず、1947〔昭和 22〕年 9 月 10 日に長野県地方優良公民館の地方表彰を受け、同年 11 月 3 日に

⁷¹ しかし、岩手県水沢市の後藤伯記念公民館を公民館第 1 号とする言説が繰り返されている。たとえば本玉（2003）。

準優良公民館として中央表彰された（遠山 2014:28）⁷²。その表彰の主たる理由は、「疎開文化人を公民館の学習と結びつけて、大きい成果をあげた」（勝野時雄 1966:90）ということであった。この中央表彰については 1947〔昭和 22〕年 11 月 3 日付け毎日新聞に記事が載っている。「優良公民館に文化大臣賞」というタイトルで、毎日新聞と社団法人生活科学化協会が優良公民館を選出することになり、地方推薦の 95 公民館からさらに優良 4、準優良 8 の計 12 の公民館⁷³を中央表彰と決定し、文部大臣賞が贈られたという。関口が関わった妻籠公民館は、準優良の 8 館のひとつに選ばれていた。この表彰は第五回生活科学化優良団体顕彰⁷⁴で、表彰状は昭和 22 年 11 月 3 日付け、署名は文部大臣森戸辰男、文面に社団法人生活科学化協会と毎日新聞社によるものとある（『南木曾の歴史 歴史資料館展示図録』72 頁掲載写真）。

その後の町並み保存に繋がる公民館運動、それは、戦前からの御料林問題に発するものであって地元の必要が盛り上げていったことに異論は無い。しかし、妻籠を語る資料には必ず、1947〔昭和 22〕年の表彰が言及されている。公民館運動がかくも盛り上がったのは表彰を受けたことが大きいと言えよう。その表彰は戦中から続くものの一環であって、妻籠公民館運動の性質を示す本質的な意味があるのかという疑義はある。が、表彰の質や等級とは別に、表彰されたということが語り伝えられて運動につながったというのは事実である。そして、公民館運動表彰に関口が与かって力あったというのも事実である。

4-1-2 米林富男と勝野金政

関口の疎開は、米林が手引きし、勝野金政が受け入れたものであった。

この辺りの消息を語るものとして、当時の関係者の回想記や現地の町誌がある。刊行されたものもあるが、未刊行のものもあり、まずはこの資料の検討を行う。資料に登場する人々についても言及する。

繰り返しになるが、未刊行の資料としては 3 点がある。

- a. 関口から勝野金政への手紙（1948〔昭和 23〕年 12 月（日付不明））
- b. 勝野金政の手記『今日の妻籠』（「昭和五十七〔1982〕年四月」という日付あり。）
400 字詰め原稿用紙、24 枚、追記 8 枚。
- c. 米林富男の手記『夜明け前』（執筆年不明）200 字詰め原稿用紙、13 枚。

⁷² 岡田（1985）は「妻籠公民館は昭和二十二年九月十日、優良公民館として毎日新聞社から表彰を受け、ついで十一月三日に準優良公民館として文部大臣表彰もうけた」（岡田 1985:11）とするが、ともに毎日新聞が関わっていることは表彰状の文言からも明らかで、遠山の記述の方が正しいと思われる。

⁷³ 優良公民館：大館町公民館、殿下村公民館、余土村公民館、北郷村公民館

準優良公民館：苦小牧町公民館、大宝村特設公民館、川崎市宮公民館、妻籠公民館、明世村公民館、久常村公民館、大津公民館、庄内村公民館

⁷⁴ 国民生活科学化協会は 1941〔昭和 16〕年 9 月に発会した組織である。「生活科学化優良団体顕彰」だが、「各地方で顕彰、その中から審査して中央顕彰が実施された。1943〔昭和 18〕年度からは「健民に重点を置き実施」、1944〔昭和 19〕年度は「女子勤労の戦力化顕著なる団体」、1945〔昭和 20〕年度は「防空」についてであった」（以上、北林（2014）による）。1946〔昭和 21〕年度は不明だが、1947〔昭和 22〕年が第 5 回となって、公民館の表彰であった。

まず、勝野金政について簡単に述べる。

勝野は1901年〔明治34〕年4月9日、長野県読書村にて誕生（すなわち関口の疎開先は勝野の故郷）。関口より7歳年下にあたる。日本大学放校処分を経て、早稲田大学露文科入学、在学中に、パリ大学留学。フランス共産党入党。パリ警視庁に逮捕され国外追放、フランクフルト、ベルリン経由で1928〔昭和3〕年、モスクワへ向かう。モスクワでソ連共産党に移籍。片山潜の秘書、東方学院講師を歴任し、1929〔昭和4〕年にはソ連国籍を取得している。コム・アカデミー・世界経済研究所大学院大学入学後の1930〔昭和5〕年、国家政治保安部（GPU）に逮捕されプトゥルスキー監獄に収監される。1932〔昭和7〕年、シベリア・マリンスクコンセントラル・ラーゲリへ。ペロモノカナル／白海・バルト海運河建設にも関わった。1934〔昭和9〕年6月、5年の刑期は3年半に減刑され釈放。モスクワ日本大使館に自首、保護され、同年8月にシベリア経由で11年ぶりの帰国を果たしている。1937〔昭和12〕年より参謀本部嘱託に、翌年1938〔昭和13〕年からは九段事務所にてソヴィエト研究所対ソ戦略に従事している⁷⁵。

2021〔令和3〕年10月13日付『東京新聞』には藤村の『破戒』は1931〔昭和6〕年に世界で初めてソ連で翻訳されたこと、そのいきさつが掲載されているのだが、そのキーパーソンとして勝野金政の名前が挙がっている。

記事には、「ソ連は、ほとんど知られていなかった日本人作家の中から、どうやって島崎藤村を見出したのか。『破戒』の翻訳の実現に大きな役割を果たしたとみられるのが、藤村と同郷の共産主義者勝野金政だ。」とあり、この紙面で勝野は「1901～84年。長野県南木曾町出身。愛知県の旧制中学早稲田大学などで学ぶ。ソ連のソルジェニーツィン、フランスのアンドレ・ジッドに先駆け、スターリン体制を告発した作家として、ロシアでは「日本のソルジェニーツィン」と呼ばれる。」と紹介されている。（以上東京新聞、2021〔令和3〕年10月13日付）

ロシアのロシア事情・文化紹介サイト「ロシア・ビヨンド」でも同様に「日本のソルジェニーツィン」として紹介されている⁷⁶。

次に米林富男についてである。関口より11歳年下にあたる。一般には社会学者、東洋大学社会学部教授⁷⁷、アダム・スミス『道徳情操論』の翻訳者として知られるが、出版人でもあった。『出版書籍商人物事典』（金沢文圃閣）の第2巻、95頁に米林が立項されている。

⁷⁵ 勝野金政の長女稲田明子が館長を務める「勝野金政 web 記念館」サイト <http://katsuno.life.coocan.jp/>（サイト閲覧 2021年10月25日）による。また藤井一行による顕彰、稲田明子による記事がある。

⁷⁶ オレグ・エゴロフ 2020年12月24日。

<https://jp.rbth.com/history/84657-nihon-no-solzhenitsyn-katsuno-kinmasa>（サイト閲覧 2021年10月25日）

⁷⁷ 東洋大学教員としては東洋大学社会学部設立に尽力した。また、産学協同の発想をアメリカから東洋大に導入し、東洋大学にテレビ局を開局し通信教育を行おうと構想したとも言われている。

<https://www.toyo.ac.jp/site/soc/chapter05-01.html>（サイト閲覧 2021年12月25日）

日光書院 米林 富雄

明治38年9月12日、石川県金沢市に生る。45歳、昭和3年東大文学部社会科卒。そのまま母校にふみ留まりて助教授たること十年、同13年出版業界に入り日光書院を創業、別に当時満洲新京東光書苑（福家俊一氏）の東京支社長となった。企業整備の際には三社を買収して残った。終戦の年の20年12月病氣静養のため事業を友人坂田厚英氏に譲渡して信州の山中に赴き在留四年、昨年10月病いえて帰京し、同11月同書院を譲戻して業界に復活した。信州在留中、アダムスミスの道徳情操上下論千八百頁を訳了、上巻A5四百頁四百円を今次発行した。別に同書院の兼営にかかる同所、吾妻書院は今回同書院を離れて独立した。長野県社会教育委員、趣味は読書、酒、煙草は何れも好まない。（出典：「業界人の横顔」『帆刈出版通信』第153号、昭和24年1月6日）

戦中は諜報機関で活動していた。自身の手記に以下の記述がある。

〔……〕一部の参謀本部関係者の援助で藤村、池田、モリ等の民間人によって対敵放送機関がつくられ、直接アメリカ国民に平和を呼びかけることになった。最初赤坂山王ホテルで準備され。やがて駿河台の文化学院に移った。そして私は池田徳真氏と知り合いであった関係上、はからずもそうした機関に参加し、逆に敵側の日本向け短波放送を聴く役割をになわされた。こうして「駿河台技術研究所」の仕事は昭和十八年十一月三日から始められた

（米林富男『夜明け前』〔以下『米林手記』〕執筆年不明:1-2）

勝野金政の手記に依れば、陸軍参謀本部宣伝謀略対米戦事務所（後の駿河台技術研究所）で勝野は米林と出会っている。このとき勝野は対ソの、米林は対米の専門家として活動をしていた。「何時の頃であったか、此の米林富男さんが私に向って疎開の話をもちかけた。」（『勝野金政手記』1982:8）とあり、この二人により妻籠疎開は具体化していったのだ。勝野の手記には以下の記述がある。

〔……〕一ヶ月余の旅行（筆者注：満州国のソ満国境巡視・視察のこと）をすませて帰省して見ると、日本の状況は大分悪化していた。南方ではガダルカナルから後退し、東京では防火訓練が盛になり、疎開問題がやかましくなっていた。私は故郷に母を残し、東京から疎開問題が起きれば、一時そのままにしてある故郷に戻り其処から再起を計る計画であった。（『勝野金政手記』1982:4-5）

勝野は米林から持ちかけられる前から既に、ふるさとしてある妻籠への疎開を考えていた。勝野の手記に名前が挙がっている疎開メンバーは、日光書院社長で社会学者である米林富男、日光書院の経営者である桐島龍太郎、「日光書院のドル箱」（『勝野金政手記』1982:9）

となっている関口、初代国鉄総裁の実兄である下山、大同印刷社長の井関好彦とその専務の須藤紋一、大雅堂の田村一派である。この他、それぞれの社員や親類など。

米林富男の手記では以下のように記述されている。

昭和二十年三月十日の大空襲を経験しては、到底東京にとどまる気にはなれず、医者のおすすめもあって思い切って木曽山中に疎開することにした。これには同調者が多く、結局私の経営する出版社に関係のある十三家族が共同して山の中に入り、荒地を開拓して新しい村をつくるという計画である。幸い駿河台技術研究所で知り合ったロシヤ通の勝野金政氏は木曽の出身者で自分の土地を提供した上に、いろいろと受け入れ方を世話して呉れたので、四月中頃までに全家族の木曽谷疎開が実現した。

（『米林手記』：4）

この二人の手記によれば、妻籠疎開は米林主導で計画され、そこに勝野や関口が関わったと考えられる。関口の疎開の大きな契機となったのは米林富男と勝野金政であることは間違いない。

だが、話はそれだけではない。単なる個人的な繋がり以上のものがそこにあった。

4-1-3 出版事業疎開の一環として

関口達の疎開は、出版事業疎開の一環でもあった。

関口が語学書で関わっていた出版社は以下のとおりである。創業年と廃業年とともに示すと、

尚文堂	1901〔明治 34〕	－1938〔昭和 13〕年頃
橘書店	1931〔昭和 6〕	－1943〔昭和 18〕
日光書院	1938〔昭和 13〕	－1950〔昭和 25〕年頃
三修社	1938〔昭和 13〕	－現在
第一図書	1949〔昭和 24〕	？－1959〔昭和 34〕年？

所謂大手ではなく、小さな、たいていは創業すぐの出版社との関わりが多かった。なお、現在判明している、最も古い関口名義の刊行物は、ゲーテ作・関口存男訳『名脚本集；第1編 タッソー』（以文館、1919〔大正 8〕年）である⁷⁸。

関口はこれらの出版社からドイツ語関係の主要著作を既に多く刊行していたわけだが、メインとしていた版元は日光書院であり、そして日光書院の編集者は米林富男であった。米林の手引きにより妻籠へ向かったこと自体は上述の通りで、米林の手記からすでに判明しているが、その疎開には両者の個人的な繋がりに加えて、出版事業者の疎開という要因もあった。

⁷⁸ 関口日記（1919〔大正 8〕年 10 月 15 日）にも、「「ゲーテ」の「タッソー」を訳したのが近々本屋から出版される。」と書かれている。

朝日新聞には日本出版助成株式会社 専務取締役 福林正之氏による談話が掲載されている。

著者と共に集団疎開

出版事業は戦災下どうなる

〔……〕如何にして出版を続けるかといふことになるが、まづ出版力を地方へ疎開、分散してたとへ本土の連絡が分断されようとも、出版機能が全滅することの無いやういま全力を挙げて態勢を整へてゐるところなのだ具体的な構想としてはだいたい出版事業を全国六箇所位に分散させる心算で優秀な印刷力を山間地にうつしてゐる〔……〕新しいところでは日光書院が著者群、編輯者の十一家族を引連れて木曾の山奥に疎開した、この面々は木工所を經營し飛行機の部分品を造るかたはら山地も開墾すれば、一方著述編輯を続け文字どほり晴耕雨読の生活を続け〔……〕

（朝日新聞 東京 1945（昭和20）年6月22日 朝刊）

本記事にある日光書院と関口との関わりは深く、創業の1938〔昭和13〕年には早くも「月刊講座ドイツ語」創刊5月号（～1945〔昭和20〕年2月号その後休刊）の発行を開始している。さらに『獨作文教程』、『独逸語学講話』、『標準初等ドイツ語講座』（上・中・下）といったその後長きにわたり版を重ねることになる関口の主要著作の数々はこの日光書院で刊行されている。

この記事からも、1945〔昭和20〕年に関口が妻籠疎開に至ったのは、出版事業者の疎開という外的要因もあったことがわかる。

ここで、戦時下における言論・情報統制とその機構について簡単にふりかえっておきたい。

戦時下における言論・情報統制と抑圧の機関でありマスコミ政策の決定機構であったのは情報局（1940〔昭和15〕年発足、その前身は内閣情報部）である。その情報局の下部組織として日本新聞会や日本出版会（その前身は日本出版文化協会）があり、また外郭団体としては大政翼賛会文化部、大日本言論報国会、日本編集者協会、出版報国会、文学報国会など多くの組織が存在していた。1945〔昭和20〕年3月には用紙確保のための一括荷受機関として「日本出版助成会社」が設立されている。日本出版会は1943〔昭和18〕年2月に公布された「出版事業令」（国家総動員法に基づく）により発足、出版事業の徹底的整備を目的としていた。1943〔昭和18〕年当時、出版業者数3395、出版事業を行う公益団体数1356（岡野1981：447）という現実があり、これだけ多くの出版業者があつては戦時下の言論統制は容易なことではなかったのだ。日本出版会は政府の意向に沿って、出版事業者の統合、削減を行った。

事業者の中には、自ら存続を諦め、転廃業が続出したという（岡野1981:447）。1943〔昭和18〕年秋から1944〔昭和19〕年春にかけての出版企業整備により、「一九四年三月の最後の決定をみたときは、二七四三社が一七二社となったのだ。」（岡野1981：448）とあり驚異的に削減されたことがわかる。別の資料では「出版社の整理統合は残存出版社数を二百三社（一九四四年五月、日本出版会発表）と決定したように、新体制当初の三千六百六十四社

（うち書籍のみを発行するもの二千二百四十一社）から比較して、その社数は約十八分の一にまで整理統合し」（吉田則昭 2021:204）とある。依ってたつ資料が違うのか、数字が異なっているが、まだ確認は取れていない。

日本出版会の「昭和 19 年 11 月 25 日現在・会員名簿（一）」⁷⁹を確認してみると、掲載されている会員は全 843 団体（出版社だけではなく、教育研究機関、一般企業なども入っている）、うち書籍のみ発行している団体は 103、雑誌のみは 665、書籍と雑誌を発行していたのは 75 であった。

この会員の中に日光書院も入っている。表示は以下の通り。

名称・商号：合資会社 日光書院
事業主 代表者：米林富男
会員番号：三三〇〇二九 （完全には判読できず）
書籍部門：教養専門 少国民
雑誌題号：ドイツ語 模型
事業所 支店 出張所：神田区一ツ橋二ー三
電話番号：九段二一四五 二一二七

関口と共に妻籠に疎開した大雅堂もこの名簿に名前がある。

名称・商号：株式会社 大雅堂
事業主 代表者：田村〇男 （完全には判読できず）
会員番号：二三二〇〇〇
書籍部門：教養専門 教養厚生
雑誌題号：物象 やまと
事業所 支店 出張所：京都市中京区四条通烏丸東入 東京支店本郷区湯島一ノ一
電話番号：本局三一ー四 三一ー五 下谷三六〇〇

1943〔昭和 18〕年秋から 1944〔昭和 19〕年春にかけての厳しい出版企業整理を日光書院が生き延びていることには何か理由があるかもしれない、またその出版社で関口が書籍、雑誌を刊行したことも偶然であるのか、必然であるのかは未だ判然とせず、また解明することは困難に思われる。しかし、この二人の関わりが関口の妻籠疎開に結びついていることははっきりしている。

共に疎開をしている人たち、日光書院、米林富男、いずれも「日本出版会」との関係が深い。関口が意識していたのか否かはわからないが、関口の疎開は、前から知り合いであった

⁷⁹ アジア歴史資料センター 公開資料

<https://www.digital.archives.go.jp/das/image/F0000000000000217420>

米林富男と勝野金政が手引きしたもの、ということに加えて、国策に沿って行われた側面を有していた。

さて、戦時下における言論・情報統制機関である情報局の下部組織である日本出版会は、どのようないきさつで在京出版社を全国各地に疎開させるという計画を立てることになったのだろうか。

米林の手記には下記のような記述がある。

〔筆者注：昭和 18 年 11 月より〕私は敵軍の日本本土上陸を確信し、あらゆる生産施設の山地疎開が必至であることを痛感した。当時私は出版社「日光書院」を経営していた関係上、業務委員をして日本出版会会長久富達夫会長に事態の急迫状況を報告し、すくなくとも印刷能力の一部を中部山間地帯に移して、国民学校で使う教科書位は継続出版できるよう配慮すべき必要を説くと同時に、近衛文磨公を取り巻く別のグループで計画していた和平工作にも参加した。（『米林手記』：2）

米林が疎開の必要性を進言したことだけが出版事業者疎開計画の契機となったとは言いきれない。しかし、米林の情勢把握と判断が日本出版会に影響を与えたとは言えるのではないだろうか。

4-1-4 大政翼賛会文化部による政治的要請

大政翼賛会文化部長、岸田國士の筆による『素人演劇運動の理念と方策』⁸⁰（1942〔昭和 17〕年）がある。大政翼賛会文化部の名で刊行されており、戦時下の文化活動の指針であり、通達と見なしてよいだろう。

関口がこの岸田の「理念と方策」に言及している記録はない。しかし、関口が知らなかった、意識していなかったとは考えにくい。関口は何より演劇人であったし、岸田と個人的にも繋がりがあった。陸軍士官学校の先輩後輩であり（岸田は陸士 24 期、関口は 27 期）、目白文化村での付き合いもあった。そして、妻籠での関口の演劇活動は、この「理念と方策」に合致するのである。戦後になるが、岸田と同じチーム「素人演劇」をタイトルに冠した『素人演劇の実績』（愛育社、1947〔昭和 22〕年）も刊行している。

以下、岸田の「理念と方策」の記述に即して検討する。

大政翼賛会文化部編『素人演劇運動の理念と方策』の、大政翼賛会文化部長、岸田國士の手になる序には、

現在の非常時局が、文化運動に課してある使命には二つの面がある。一つは戦時下の国民生活の向上刷新に寄與し、その生活力を培養するといふことであり、その二つは現代

⁸⁰ 大政翼賛会文化部編『素人演劇運動の理念と方策』、1942〔昭和 17〕年 3 月、翼賛図書刊行会（国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1025571>〔2021 年 4 月 5 日閲覧〕）

の日本文化を一新して、名實ともに東亞の諸民族を指導することが出来るやうな、雄渾で高雅な新國民文化を建設するといふことである。

とある。その理念を抜粋してみる。

一、素人演劇運動は生活を豊かな、潤ひのある、美しいものにして、國民の生活力を培養するための運動である。

二、素人演劇運動は集團生活を地盤として展開され、生活の協同化促進に貢献しなければならない。

三、素人演劇運動はこれに参加する人達の自發性と創意性とを尊重しなければならない。

四、素人演劇は職業化したり、半職業化したりしてはならない。

続いて、「組織」、「活動方法」「脚本の選び方」といった個別の項目について書かれている。

「一、組織」には、この組織が村や職場全体と結びついたものであるべきこと、演劇好きな人が集まって「××劇団」を作るのは避けた方がよいことが挙げられている。

「二、活動方法」には、職業化を避けるためにも、普段の生活や仕事に差し障りがないよう公演を繰り返さず、村や職場の行事と結びつけることが奨励されている。

「三、脚本の選び方」では、文学好きな人や演劇愛好家の文学的趣味で選んではいけないこと、かといって教化的意義だけを重んじて選ぶのも危険であること、脚本選定委員会といったものを作り、話し合うのがよいことが書かれている。

「四、演劇指導者」の項には、村や職場に偶然いた歌舞伎や新派、新劇の経験者が祭り上げられることがあるがそれはよくない。理念をしっかりと理解している素人に頼むべきこと、専門家を頼むならば中央から正しい人を招くべきことが書かれている。

ここを読めば、新劇の実践者であり、理論的指導者でもあった関口は「中央」から来たふさわしい人に該当するように思われる。

「五、経費」。素人演劇は、経済的利益を目的としていないため、なるべく経費をかけないことが原則。

この『素人演劇運動の理念と方策』が発行されてから3か月後の状況が、大政翼賛会実践局文化部の「文化部事業報告（昭和十七年七月現在）」（北河編 2000:47）に出ている。

「第四 部門別文化運動 （三）二、素人演劇」に

「〔……〕地方に於ける素人演劇運動指導のため部員を派遣すること三回、外に適當なる演劇人に依頼して、地方に於ける素人演劇運動の指導に当らしめつゝある。」という記述がある。妻籠に向かった関口がこの任にあったのか、それを示す記録はみつからないが、1940年時点で大政翼賛会文化部長であった岸田國士と親しかったということを考えると、この大政翼賛会の方針を知った上で活動していた可能性はないとは言えない。

傍証となり得るのが、1942〔昭和 17〕年 12 月 1 日付での関口の大日本翼賛壮年団入団である。大日本翼賛壮年団（1942〔昭和 17〕年 1 月－1945〔昭和 20〕年 6 月）は、大政翼賛会の外郭団体である。

4-2 妻籠での活動

関口が妻籠で行ったこととして以下が挙げられる。

- ・ドイツ語学、ドイツ語で記されたヨーロッパの思想の研究（空襲で焼失してしまったと思われた研究ノート類は無事で、後に妻籠にも届けられた）

- ・米林・勝野達との社会・文化活動

- ・演劇活動 戯曲執筆と上演指導、関連書籍の執筆

ドイツ語関係に関しては、疎開を経て帰京直後の 1949〔昭和 24〕年にドイツ語学習雑誌『月刊ドイツ語』（日光書院）を企画したのみならず、それを「私一人で一年間隅から隅まで全部書いたことがある」（『趣味』:2）ほどで、妻籠時代にも研究が続いていたことが想像される。『月刊ドイツ語 復刊第 1 巻第 1 号』（日光書院、1949〔昭和 24〕年 4 月 1 日）の巻頭「復刊の御挨拶」には、

本月刊ドイツ語編輯の責任は全部日光書院にございますが、一つの古今未曾有の試みとして、当分の間、執筆の全部を関口存男先生に御依頼致しました。関口存男先生が我国独逸語界における最高権威であることは、既に「関口独逸語」という通り言葉が世間で用いられていることによつても皆様既に充分御存じでございましょう。

とある。

この月刊誌には「欧米思想縦横記」というヘーゲルとショーペンハウアーの思想を紹介した記事もある。なお、版元の日光書院は、関口とともに疎開していた米林が運営する出版社である。

米林・勝野との活動については、『南木曾町誌 通史編』に記載がある。米林が指導した「調査部」では、村の実態調査および、調査資料の展示を、勝野の「社会部」では、御料林解放運動、配給物資の適正化などを手がけ、関口の「文化部」では語学や学術講座、講演会の開催、創作劇の指導、上演などがなされた。文化講座の講師として、経済学者で東京都知事の美濃部亮吉（1904〔明治 37〕年－1984〔昭和 59〕年）、フランス文学者、評論家の中島健蔵（1903〔明治 36〕年－1979〔昭和 54〕年）、治思想史学者の松平齊光（1897〔明治 30〕－1979〔昭和 54〕年）、新劇俳優の三島雅夫（1906〔明治 39〕－1973〔昭和 48〕年）、法学者の川島武宜（1909 年〔明治 42〕－1992〔平成 4〕年）などが招聘されたことが記録に残っている（勝野時雄 1966:90）。また、初級美術講座が米林宅で、中級が関口宅で毎週

開催された（岡田 1985:11）。婦人文化教育もなされ（詳細不明）、音楽研究会もあって、ここでは、関口の次男存彦がコーラスの指導をした（『随筆集』：15）⁸¹。

そして、特記すべきが演劇活動であった。関口は、3年8か月の妻籠時代に演劇の分野で少なくとも以下のことをなした。

1. 妻籠国民学校の児童達との公演活動：戯曲提供、演劇指導
2. それに基づいた著作『素人演劇の実際』（愛育社文化叢書6 愛育社、1947〔昭和22〕年）
3. 公民館運動に伴う戯曲の執筆
4. 実際の上演指導

まず、1. と2. について。関口が語る所によれば（他の文証調査中）、1945〔昭和20〕年11月末に村の演芸大会が企画され、関口のいる隣組（常会）でも女兒達の芝居を出すことになって、関口はその脚本と上演指導を行った。「期日がもう後五六日しかない」（『素人演劇の実際』：11⁸²）、という状況で、関口は坪内逍遙の『いつまでも続くお話』なる童話劇を改作し、登壇を希望する少女達は全て台詞付きで登壇させることにしたのである。出場するのは「みんな国民学校の五年生の女の兒ばかり」（26）であった。但し主役だけは、「疎開者の下山さんといふ知人に、丁度嫁入前のお嬢さんがあつて」（51）彼女がつとめたという（関口と一緒に東京から疎開して来た人に下山という下山総裁に繋がる人がいた）。

上演は成功し、この経験をもとに関口は、『素人演劇の実際』を執筆・刊行した。前書きは1946〔昭和21〕年7月28日・妻籠にて、となっている（6）。著者略歴では関口は「著者は青山杉作氏らと共に踏路社の同人として本邦最初の新劇運動に参加〔……〕今ではむしろ獨逸語の権威者として世に知られている人だが、翻譯や脚色の方では〔……〕数多くの仕事をしている」（186）とある。

この2. の書は、坪内の原作と関口の改作の脚本とを示し、関口脚本の台詞毎の演出上の留意点を図解とともに解説し、それをついでとした関口自身の自己紹介、演劇についての見解、時局への感想、文明観を述べたものである。

自身については、「現在劇界に活躍している職業人ではなく」（4）しかし「新進候補者でもない」（4）とする。一方で脚本執筆・上演指導では「久し振りで演劇人の血が體内に横溢」（25）し、「場数を踏んできた老練な者の持つてゐる腕前」（58）を発揮したという。登壇する各子ども達それぞれに台詞を与える「多少文學的才能もある」（154）。

劇についてはほぼ全ページに言及がある。2つだけ挙げる。「私は昔から『劇は劇なり』といふ變な文句を用ひてゐる。〔……〕つまり劇の本質には、小説などよりはずつと劇しいところがあるといふ意味である。」（135）。また、また舞台の上での俳優のやりとりに「公開的性格」を確保させる必要があることも説いている（169）。

⁸¹ 岡田は存彦との思い出を以下のように述べている。「私〔岡田〕には当時早大の学生で復員してこられた関口先生の息子さんである存彦さんとかかわりが深い。その頃の青年男女を集めてコーラスグループをつくった。指導者は小学校の音楽教師に依頼し、シューベルトの「ます」をはじめ数々のドイツ民謡やアメリカ民謡を習った。／存彦さんが勝手に覚えてきた〔……〕ドイツ民謡を先生が聞いて〔……〕存彦さんの歌に合わせて先生が作詞し直してくれた逸話もあった。」（岡田 1985:11）

⁸² 以下、（）内数字は掲載箇所のカギ括弧を示す。

時局への感想、文明観も興味深い。いくつか引用する。

日本人は一たい表情が貧弱で〔……〕すべてが栄養失調藝術の徴候を呈してゐる。我々日本人は、もつとお互ひにうまいものも食ひ、表現や表情に於ても、もつとカロリーを發散した方が好いと云ふのが私の日本文化觀である (88)

この栄養失調・栄養不良と言う表現は繰り返されている。「凡ゆる日本的なものに共通な、過去二千有餘年の栄養不良」(94)、「日本文化は、典型的な栄養失調文化なのである」(95)。それ故「日本藝術の空氣をほがらかにし、カロリー値の高い體臭發散を行ふことを、少くとも私自身は藝術の當分の理想と心得てゐる次第である」(95)というのである。

演劇指導にあたっての自己認識、指導対象との關係についても述べられている。自身、場渡りの的にその場を盛り上げ、大衆を動かす、また大衆はそうのように動かされる存在である、ということである。

わたしと云ふ男の血管の中には、本當に演劇人の血、芝居者の血が流れてゐるからであつて、芝居者の血とは何ぞやと云へば、これ即ち『場わたりの才能』である。どんな事を犠牲にしても、とにかく其の場だけはなんとか巧く（時には拙く）解決して行く勇猛果敢なる藝人氣質、これである (155)

其の時其の場の面白さと云ふ事を以て本能的に人生の無上絶對命令と心得てゐると云ふ種類の氣質、これである (155)

衆は指導一つでどうにでもなる。好い意味に於ても悪い意味に於ても『だましの利く』代物であるから、だまして悪いことをすることも出来れば、だまして善い事することも出来る

衆の目には善もなければ悪もない、善を善と感ずる見識もなければ、悪を悪と感ずる良心もない。ただ意氣に感じて善に趣き、調子に釣られて悪に歸するのみである。

衆を動かすのは手段であつて、正邪曲直、事の輕重に對する判斷ではない。内容ではなくて形式である。『何』で動かすかは問題ではない、『如何に』動かすかのみが問題である。

衆は巧妙な指導者によつてのみ動く。衆はたとへば猛獸の如きものである

(以上 163)

それ故「演劇人は、煽動政治家と同様、衆を相手に仕事をする點に於て、猛獸使ひに似た所がある」(164)

これは、一種の諧謔とも正味の告白とも戦争体験を経た見解とも見なすことができるだろう。実際、坪内の原作に基づいた自身の仕事を紹介するのは、文化の進歩のためであるという認識であった。

全般の進歩向上のために人と協同し、且つは人の業績を率直に認めて之れを利用しつつ自己の向上をはかり、且つは人に自己の業績を吝まらず利用させて人の進歩を計るといふ氣風、これが無い所には眞の文化は興り得ない (48)

3. と 4. について。疎開時代の関口存男の代表作は、「争え、但し怒るべからず」⁸³と「王様と予言者」⁸⁴である(中田(1985)では「争え! 但し決して怒る可からず」としている。)。このほか「乞食の歌」、「巣立ち」、「高原の灯」の3編の名が出てくるが現物は未見。

中田スウラは、現在に伝わる2作を「〔妻籠の〕青年達自身による創作演劇活動」(中田1985:81)「青年達の創作演劇の代表作」(中田1985:81)とみなしている。但し、そこに関口が大きな役割を果たしたことも認めている。上演された1947〔昭和22〕年、未だ民主主義に戸惑いを覚えていた青年達、彼らの為の戯曲であった。

そのような青年達のとまどいを、関口は青年達との交流の中から鋭敏に察知していた。関口の脚本に対して青年達が注文をつけることなどなかったようだが、関口の脚本は青年達との交流の中から青年達のために創られるものである。従って、青年達の戸惑いを解く手掛りとして「怒る可からず」の劇は作られたと言えよう。(中田1985:84)

演劇活動が妻籠公民館運動の青年達主体のものであったとしても、脚本を作るにはそれなりの才能と経験が必要である。そして、関口にはそれがあった。若い時からの殆ど職業演劇人といってよい活動があり、また、ドイツ語を中心とした語学知識から欧州人の思考法と思潮、そしてヨーロッパの演劇論に通じてもいた。関口の演劇活動については、疎開までの活動に加えて、妻籠でも活動していたことは上に示した通りである。妻籠でも国民学校の子供達を使った演芸会ではあったが既に実地に上演をしていた。公民館運動の若者達は当然、そのことを知っていただろうし、それに基づいた『素人演劇の実際』も目にしていたと思われる。この本が出版された時、関口は「いつまでも続くお話」に出演した子供達に一冊ずつ贈ったとのことである⁸⁵。

⁸³ 1947〔昭和22〕年7月19日 妻籠公民館設立1周年記念で上演。(『公民館たより』2001〔平成13〕年1月20日)

後に『教育と社会』(社会教育連合会、1948〔昭和23〕年9月1日:54-59頁)に掲載。

⁸⁴ 1948〔昭和23〕年11月23日 秋季演芸会で上演。この2日後11月25日東京へ。(『公民館たより』2001〔平成13〕年1月20日)

⁸⁵ 『公民館たより』(2001〔平成13〕年2月25日)に掲載の磯村道代の手記による。

関口は、1947〔昭和 22〕年 10 月 27 日付けの自身の記事「木曾谷の新劇運動」（『旬刊ニュース』1947〔昭和 22〕年 12 月:20-21 頁）で、妻籠で自分が指導して活動をしていることを報告し、指導方針について証言している。

報告時点で行ったのは、1945〔昭和 20〕年の坪内逍遙原作童話劇の改作『いつまでも続くお話』、1946〔昭和 21〕年喜劇『結婚新戦術』、教育劇『高原の灯』、1947〔昭和 22〕年の公民館劇『争え、但し怒るべからず』である。このうち、『高原の灯』は教員鈴木定代の原作で、「妻籠の新劇運動が近村の注目を惹き始めたのは此の脚本のおかげ」（「木曾谷の新劇運動」:21）という（未見の『高原の灯』は重要に思えるので、探索を継続したい）。1947〔昭和 22〕年には『首相の親友』⁸⁶の喜劇も考えているともいう（これは上演が実現したのかどうか、また作品自体の初出もまだわかっていない。）。県の役人や新聞記者の来訪もあるとのことである。

上演にあたっては、自分で脚本を作ること、人を集め、演技監督をし、自分で役者もやり、開演前の解説もし、プロンプターもするので「主動者」だという。

眞の演劇は必ず俳優が主動者たるべきだといふのが寧ろ私の主張なのですが、現實問題となると〔……〕可哀想な娘さんや子どもをつかまへて、教へる、教へる、教へる！まるで下士官が兵隊をこつき廻すやうに、やいやいやいやい云つて、なんでもかんでも自分の思つた型にはめてしまふ〔……〕けれども、これしか方法がありません。

（「木曾谷の新劇運動」:20-21）

文言通りに受け取れば関口主導であり、『争え、但し怒るべからず』の公民館の若者達は従である。翌 1948〔昭和 23〕年 11 月の「王様と予言者」の稽古の時も関口の指導が厳しいかったことは岡田昭司も証言している。

〔……〕稽古は約一ヵ月、徹底的にしごかれて、なかなか思うようにできず泣き出す女の子も出る始末だった。しかしこの練習をとおして教えられた数々の思いは終生忘れ得ぬものとなっている。練習のときはとにかく休み時間の雑談が面白かった。私はよく苦勞せずに育った大木にたとえられ、もっとしっかり根を張らなきゃ駄目だと言われた。また「われわれはよく人からケナされたりほめられたりするがケナす奴はもちろんだが、もっとけしからんのはほめる奴だ。」……規律と時間のムダには特に厳しかった。

（岡田 1985:12⁸⁷）

いずれも関口のスパルタ教育で、その中で妻籠の若者達の自覚が促されたと言ってよからう。

⁸⁶ 『関口存男の生涯と業績』259-290 頁。

⁸⁷ 岡田はまた『生涯と業績』でも関口存男を回想している。それによれば、関口の妻籠時代は以下の 3 点である。「一、疎開当初の城山での開墾生活。」「二、演劇を通じた青年達との結びつき。」「三、村人に規律ある生活を教えたこと。」（荒木 1959: 294-297）

そもそも関口は、劇が何たるかを知っていたし、その力も知っていた。それはドイツ語関連の著作にも表れている。ドイツ語にまつわること、またドイツ語に表れた発想法を対話形式・即ち戯曲形式で示すのもまた戦前からの関口のスタイルであった。対話形式には例えば大先生と小先生との対話、雑誌購読者からの質問に後に続く号で答えるといったもの⁸⁸から、ニーチェ・キリスト・釈迦・老子・本居宣長の対談⁸⁹といった奇想天外のものまである。『争え、但し怒るべからず』の構成もまた然り。登場人物である柴田先生の発言に対して、中村先生が反応するというものである。

柴田先生は女生徒達を諭して言う：「文化国の市民は喧嘩なんぞすべきものではないでしょう？」(56)⁹⁰。それに対して中村先生は異議を申し立てる：「理をもって争うことです！」

(56)「文化国の社会生活はいわば一種のスポーツだ。スポーツにはすべてルールというものがある。規則というものがある。規則は絶対に守らなければならない。規則を守りつつ大いに相手をやっつけ、相手をやっつけつつしかも絶対に規則を守るんだ。〔……〕公民生活の理想もまたかくのごとし！ 争うことがあったら大いに争う。ただし決して怒らない。あくまでも争い、あくまでも怒らない——これが即ち民主主義の世界だ。」(57-58)

「関口の脚本に対して青年達が注文をつけることなどなかった」のも当然と言えよう。関口には十分な蓄積と用意があったのである。

同時に、青年達との活動が関口に影響した可能性もある。関口は、1954〔昭和29〕年に、その数年前、すなわち1948〔昭和23〕年11月末の帰京直後に雑誌で書いたものを『中級講話 趣味のドイツ語』（三修社）としてまとめているが、その「はしがき」に以下のように記している。

私はこう思います：人を教えるというのは、人を「刺戟」することである、と。大して教えるところがなくてもよい、「刺戟」さえすればよいのだ、——これが私の信念です。刺戟さえすれば大抵の人は後は自分でやつて行きます。後を自分でやつて行かないような人なら、教えたつてどうせやつて行きはしないでしょう。

（『趣味』：2〔引用は著作集〕）

青年達は「刺戟」で動くということは、教師をしていれば持ちうる知見ではあろうが、妻籠での活動を経ての境地だとも考えられる。だとすれば、関口の戦後の教育活動にとって妻籠での経験の意味は大きい。

なお、この本には「欧米思想縦横記」と題して、やはり、青年とわたしの対話でヘーゲル弁証法哲学を解説しているが、西洋人の物の観方を「動的」とした上で、わたしこと関口は「西洋の西洋らしい所は戯曲にあらわれているんだ。西洋人の物の観方の動的なところは、

⁸⁸ 『『意味形態』ということに就ての押し問答 —和歌山市の岩橋氏、千葉県島の島岡氏の質疑に答えて—』、『月刊ドイツ語 復刊7号』、日光書院、1949〔昭和24〕年10月、20-26頁。

⁸⁹ 『セレクション関口存男 ニイチェと語る』、三修社、2019〔令和元〕年に再録。初出は『獨文評論』尚文堂、1935〔昭和10〕年8月号。

⁹⁰ 引用は、『教育と社会』54-59頁（1948〔昭和23〕年9月1日発行、社会教育連合会編集、印刷局発行）

その生態がそもそも動的なところから来ている。」（『趣味』:272）と断じている。ここでも妻籠時代の『素人演劇の実際』にも使われた文言「劇は劇なり」が、わたしこと関口のせりふとして「劇しき故に之れを劇と呼ぶ。」（『趣味』:272）という形で登場している。定立・反立・統立（関口の用語）が弁証法であって、常に争いが想定されているのであり、「劇というのは、つまり、此の弁証論的發展という人間意識の根本法則に勢よく拍車をかける芸術だ」（『趣味』:274）とする。妻籠公民館運動での創作も、そのような意識で進められたと考えられる。

2001〔平成13〕年に刊行された『公民館たより』にも当時の思い出として関口について以下のように語られている。

当時の一流のドイツ語学者であり、演出家でもあった関口在男先生が、この妻籠に疎^{マツ}界していなかったなら演研（筆者注・妻籠公民館演劇研究会）は、生れていなかったし、生れていたとしても活動の質は、比べられないものだったでしょう。

もし、先生が妻籠以外の所へ疎^{マツ}界していたら、そこに演劇は、…… 多分、根付いていなかった。

妻籠は芝居好きが多かった。⁹¹

関口は確固たる目的を持って妻籠に疎開をしたのか、という点については、記録が見つからないが、これらを読めば、演劇を志し、自ら演じ、また演出もした関口が、芝居好きの多かったというこの妻籠に疎開し、その土地の若者たちに指導をし、また当地の人たちもそれをしっかり受け止め、後世につなげていったという事実が見えてくる。関口の妻籠疎開は偶然であったかもしれないが、それは必然であったと思える。

関口のものにとれる文言が残っている。

〔……〕（筆者注・演劇は）永い間忘れられていた人間性の復活を前提としたものでありたく、一時的な興味本位のものであってはなりません。

軍国主義の雰囲気の中で「考える」ということを忘れ単に漠然たる不安と疑問のうちに戦争に駆り立てられた我々日本人、特に農村人の中に再び人間本来の姿を考えさせる刺激剤として、初めてその存在価値は、認められるのであります。〔……〕

解説

プログラムの裏表紙に書かれたこの文章は、関口先生によるものである事は想像に難くない。

この演芸会の基調のみならず、妻籠の将来にわたっての方向付けがここに成されたものと判断したい。⁹²

（昭和21年11月23日 演芸会 プログラムより）

⁹¹ 『公民館たより』妻籠公民館史調査委員会 2001〔平成13〕年4月5日発行

⁹² 『公民館たより』妻籠公民館史調査委員会 2001〔平成13〕年3月13日発行

妻籠における活動について寺中作雄は以下のように述べている。

この村に二人の知名な文化人が疎開して来ている。一人は社会学を専攻し、一人は演劇などにも深い造詣を持つている人である。しかも二人とも、きわめて村の問題について熱意をもっている。公民館もこの二人の意見を取り入れ、またその経験を生かして運営されている。すなわちその経営は、村の青壮年がこの二人を中心として、村造りに努力している姿そのものであるといつていい。(文部省社会教育局 寺中作雄 1948:68-71)

「社会学を専攻し」ているのは米林富男で、「演劇などにも深い造詣を持つている人」は関口のことである。米林という社会学者と関口がタッグを組んで活動したことが、この村の運営に大きな影響を与えたことが見えてくる。

勝野金政の手記にも妻籠の演劇について言及されている。

妻籠は昔から村芝居等の愛好家があり、飯田と接近し素人演劇家が相当あり町のその為の劇場もあったらしく、今早稲田で劇の講座を持っている河竹黙阿弥氏の父君⁹³は養子で、その友人奥谷の先代の六郎氏とは学校の講義より芝居が好きでいつもその方に熱心であったと云う事であった。関口さんの脚本は演技を伴って妻籠の青年に影響を与へ、彼の子息もそれを助けこの素人劇団は度々公演を開き妻籠をはじめとしてその周辺の青年男女の文化運動を起し、終戦前後の演劇運動として今日迄その足跡を残している。(『勝野金政手記』1982:17)

当時、関口から指導を受けた岡田昭司も語っている。1983〔昭和58〕年3月に妻籠宿保存財団設立されたが、妻籠宿保存運動の母体は演劇研究会のメンバーと公民館産業部の人達である(岡田 1985:10)としたうえで、これらの人々はよく話し合いをしたが、「いわば話し合いのルールを学んだことが運動の土台になってきたのではないだろうか。「争えただし決して怒るべからず」関口先生にこんな芝居もやらされた思い出がある。」(岡田 1985:11)としているのである。

『素人演劇の実際』第一部で関口は、

私といふ男が元来そうした方面(筆者注 演劇関係)の古つはものであると云ふことは誰も知らなかつたらしく、いはんや研究の材料にならうなどとは夢にも思はなかつたらしい。單に、東京から来てゐる文化人で、娘さんが三味線を床の間に置いてゐるから、おやぢさんだつて何か趣味ぐらゐはあるだらう……と云つた程度の評價から起つた話だつたのだらうと思ふ。(『素人演劇の実際』:11)

⁹³ 山本村、現在の飯田市出身の河竹繁俊(旧姓:市村)のことを指すのであろう。

と書いている。地元の人たちが関口が演劇の知識と経験を持っていることを全く知らなかったということは考えにくい、東山千栄子の公演の演出をしてから既に10年という年月が流れ、この頃は演劇人、というよりも東京から来た大学の先生、軍人さんという印象の方が強かったのかもしれない。だが、この意図されていなかったかもしれない出会いは、妻籠の地で、実りをもたらしたのである。そして、1948〔昭和23〕年11月の関口との「王様と予言者」公演を契機として妻籠演劇研究会が結成された。

直ちに言い添えねばならないが、関口存男がきっかけとなったとはいえ、妻籠のその後の運動を彼一人の功績とするのも間違いであろう。岡田(1985)は、関口帰京後の妻籠の動きも記録している。それによれば、関口帰京後、「先生から芝居のはしりは習った」というものの専門的な知識は皆無であった。妻籠演劇研究会は、1950〔昭和25〕年に舞台芸術学院「動く演劇教室」(山川幸世、いずみたく(本名 今泉隆雄))の指導を仰いでいる。但し関口が忘れられたわけではない。1958〔昭和33〕年3月30日、第一回長野県青年演劇祭に参加し、関口の「王様と予言者」を上演している(岡田1985:12)。この他、岡田(1985)は、1959,60〔昭和34,35〕年頃、長野県の公民館主事研修会で東大教授宮原誠一の講義を聴講し、高校課程の通信教育を始めたこと、馬籠(妻籠の隣)に疎開していた菊池重三郎と交流があったことも伝えている。菊池は1947〔昭和22〕年の馬籠での島崎藤村記念堂の開設に取り組んだ人である。菊池、記念堂の設計者谷口吉郎、菊池と谷口の仲介をした詩人野田宇太郎、彼らと岡田は交流した。すなわちこちらの疎開文化人も妻籠に影響していたのである。また、1965〔昭和40〕年にもとの演劇研究会のメンバーも参加して「妻籠宿場資料保存会」が発足し、これが、妻籠宿保存運動の母体となったことを証言している(岡田1985:13-14)。関口との出会いだけが動因ではない。しかし、関口との公演が演劇研究会結成のきっかけだったことを強調しておきたい。

5. まとめ 関口疎開研究の問題点と今後の課題

本論は、関口存男の伝記を資料とともに補い、誤りを指摘し、かつ、中でも重要視されていなかった疎開時代に注目した。関口は疎開文化人の一人であり、またその活躍の成果がその地に残ったと言うことを主張した。これは、疎開文化人研究の事例の補いであり、中田(1985)他の先行研究に続くものではあるが、中田達を初めとする公民館運動史研究には欠けていた、当事者関口のいわば前史を示すことによって、妻籠での成果が必然的なものであったことを明らかにしようとしたのである。

関口の生涯は、自伝や同時代人の回想のみで語られてきたが、それだけではカバーできない経緯があった。しかし、業界の事情もあり早くからドイツ語の権威として神格化されたことがあって、十分な記述がなされてこなかった。ドイツ語学者であるにもかかわらず、ドイツ語プロパーでの伝記的記述は『関口存男の生涯と業績』の他は中村(1989)のような短いものか、池内(2010)しかないのがその証左である。

一方で、疎開文化人の事例研究は大政翼賛会文化部の活動の検討とともに続けられ、北河達によって提示、研究史の総括が行われ、事例収集も訴えられていたが、20年ほど下火で、

個別の疎開資料、疎開先の地域研究、あるいは李承俊（2019）の文学研究がある程度であった。大槻・中田の調査と研究も 1980 年代前半〔昭和 50 年代後半〕のものである。

あらためて先行の疎開研究・疎開文化人研究を踏まえて、関口の生涯と業績を考えてみると、

・まず、疎開研究において、農文教や大政翼賛会文化部など関係諸団体の活動は追跡、考察されてきたし、各地方での活動も論じられてきたが（北河 1993,1997、北河編 2000）、妻籠が取り上げられることはなかった。同じ長野県でも飯田など別の地方は言及されていた。疎開にまつわる諸事情で関口が関わったはずの出版統制でも関口が論じられることはなかった。そもそも、疎開のきっかけとなった米林にしろ勝野金政にしろ勝野時雄にしろ、究明すべき点はまだ残っている。

・公民館運動・社会教育史の研究の中で演劇も取り上げられた（中田 1985・大槻 1985）。しかし、当事者であった関口の演劇にまつわる前史も妻籠での直前の活動も著作も、そこでは言及されずに論じられていた。

・関口はドイツ語学・ドイツ語を中心とする言語思想家であって、それについてはドイツ語プロパーで論じられて来た（池内 2010、中村 1989）が、関口の演劇に意味を持たせていなかった。

・関口の文法研究は今でも継承され、他言語でも参照されたり（原 2010、Kobayashi 2009）、関口文法を正面からあつかったものが出されているが（佐藤 2021）、そこでは疎開も演劇も触れられていない。

・演劇史の中ではしばしば言及されてきた⁹⁴が、主たる人物として取り上げられることもなかったし、妻籠での活動についても触れられてこなかった。

・関口存男の後の世代の弟子達——ドイツ語学者達にとっては、彼の疎開体験はエピソードに過ぎず、妻籠での活動の意味を考察したり、継承したりすることはなかった。

本稿は、以上のようなバラバラであったものを疎開文化人としての関口を軸にまとめたものである。

ここで、再び北河（2000）を取り上げてみたい。そこでは「戦中・戦後の連関」が取り上げられ、「文化運動は戦時中に途絶えたのではなく、翼賛運動の一翼として推進されたのであるから、戦後の文化運動を検討する際には戦時期の文化運動との関係に注意を払う必要がある。」（北河 2000:24-25）と指摘されていた。そして、北河によれば、戦後の文化運動として 4 種があげられる。

- 1：青年および女性の団体で、青年団および婦人会
- 2：地方文化人が主導する地域の文化団体
- 3：社会教育行政機関・社会教育団体
- 4：労働組合文化部や職場サークル

⁹⁴ たとえば、笹山敬輔（2012）:124 頁など。

そして、1-3 のいずれにも疎開文化人が関わっていたとするのである(以上、北河2000:16-18)。

関口の場合も、これら1-3の全てに関わっていたと言える。戦前からのものが関口存男をとおして戦後に伝わったということで、北河(2000)の言う連関の一事例となっている。特に「素人演劇」が戦中から戦後につながっている。但し、疎開文化人としての役割と類型から言えば、関口は独特であった。戦中には、出版事業疎開、大政翼賛会文化部との繋がりを持っていた可能性があり、少なくとも活動内容は国策に合致するいわば上からの文化指導であった。彼の態度は戦後も変わらなかったと考えられる。妻籠の青年達の集まりの方も自主的な性格を持つものではあったが、戦中からというよりも戦後の御料林問題に端を発するものであった⁹⁵。一方で、それは公民館運動という行政からの動きを利用したものでもあった。青年達の団体は自主的な集まりでもあり、同時に社会教育行政機関でもあったのである。そして、彼等青年達と関口との直接の関係は戦後に始まったものである(青年達との付き合いは次男存彦の方が深かったと思われる)。また妻籠の地方文化人との繋がりには戦前から東京で活動してきた勝野金政以外に記録されていない。

しかし、他の疎開文化人と同じく、関口が戦後の新しい運動をもたらした存在であったとは断言できる。妻籠にいたのが関口だったからこそ、戦後の妻籠があったのである。関口のベクトル―戦前からの蓄積と戦中の成り行き(「場わたり」)―と妻籠の若者達のベクトルがまさに、関口がかねてより主戦場としていた演劇で交叉・結実したのである。

関口は、京都で活動した貴司山治や三島の本部達二のような所謂活動家ではなかった。関口に文芸時評などはあっても、政治的な運動はなかった。農村での組織化体験もないし、三島庶民大学のような学校をつくるまではいかなかった。帰京後に妻籠と関わりを続け、何かの運動を続けるということもしなかった。また、丸山薫のような作品をうみだすような作家でもなかった。しかし、単に疎開先で生活しただけでもなかったのである。創作活動をし、妻籠での活動をもとに著作をし、若者の触媒となって、後世に続く運動を生み出した。妻籠での出会いは必然だったのである。

そして、出会いがもたらした火花は横に広がり(『争え、但し怒るべからず』は他地域の公民館にも配布⁹⁶された)、後代に継承された。1970〔昭和45〕年10月26日付の信濃毎日新聞にこのような投稿がある。

妻籠の心をささえるもの

〔……〕今日の妻籠をささえている精神的支柱は、敗戦の虚脱の中から立ち上がった地元青年団の演劇活動に求められると思うのである。たまたま、疎開されていたドイツ語の権威故関口存男先生が、パイプをくわえながら、演劇指導をされていた姿を今も思い出す。良き指導者を得て、戦後の精神的荒廃からいち早く脱却したのは当時の若者たち

⁹⁵ 農文教に由来する活動、復員青年達の演芸熱もあったであろうが、詳細不明。

⁹⁶ 関口による「後記」に「この脚本は妻籠公民館において数回上演したものです。各方面からのご要求に応じてこの台本のコピーを発送」(『教育と社会』(社会教育連合会、1948〔昭和23〕年9月1日:59頁)とある。

であった。今日の妻籠をその基本においてささえてきたものは、妻籠に育ち、妻籠で生活しながら本当に人間らしい生き方を必死に模索してきた、当時の若者だったといえよう。戦後二十五年。今や彼等は円熟したおとなである。妻籠が脚光をあびはじめた今、何を一番大切にしなければならないかは、彼等が一番よく知っているはずである。

（長野市 鈴木昭一 30＝教員）

これを書いている鈴木昭一(2019 年没)は、投稿時 30 歳であるならば 6、7 歳の時に妻籠における関口の演劇指導を見ていたことになる。その時の活動が今（昭和 45 年）につながり、「妻籠のころ」の支えになっていると書いている。関口の指導がその後の村の活動へと引き継がれ、住民の心の支えとしてつながっているという実感がここにあらわれているように思う。

もっとも、それが関口が意図したかどうかとは別であるし、関口の妻籠での活動も、文化人を求める戦後の全体的な流れの中での活躍と見なせる⁹⁷。また、文化人としての戦争責任を問うこともできよう（例えば、ゲッベルスのテキストの注釈本⁹⁸を作っている）。関口は終戦時 50 歳、戦争責任を追及される世代でもある。関口の妻籠での活動をこれらの点から考察し直すことは意味があると思われるが、本稿の範囲を超える。

本稿に限った範囲の中でも、今後の課題とすべきことは多い。現地聞き取り調査がコロナ禍でできなかったことはその最大のものである。また、そもそも刊行されている資料収集の点でもやり残したこと、整理不足の点が多い。関口の外務省での活動、軍関係の交流についても、法政での活動についても、当時の他の素人演劇との関係についても十分な調査を進めることができなかった。筆者は生誕 100 年で著作集の担当編集者をつとめたが、悔いが残っている。本論はその贖罪の意味もあったが、まだ果たされてはいない。

資料については、関係者、コレクター、HOSEI ミュージアム、公益財団法人 妻籠を愛する会の方々に便宜をはかっていただいた。感謝申し上げたい。

⁹⁷ 赤澤(2001)は戦後初期を啓蒙時代としてその特徴を挙げている。1：「戦時期の文化や行動に対するトータルな否定衝動に基づいていた」(322)、2：「啓蒙する側とされる側がその立場を固定させているのではなく、大衆が啓蒙を媒介に知識人の中に組み入れられていく、そうした動的な過程として存在していた」(323)。

⁹⁸ 『インテリとは何ぞや?』、独逸語訳註叢書 第 7 編、ゲッベルス著、大野勇二訳註、日光書院、1940〔昭和 15〕年。関口はこの叢書のシリーズを監修している。

文献

関口存男の著作

関口存男 『関口存男著作集』 全 23 巻+別巻、三修社、1994〔平成 6〕年。

セレクション関口存男『和文独訳漫談集』 三修社、2019〔平成 31〕年。

セレクション関口存男『ニイチエと語る』 三修社、2019〔令和元〕年。

関口存男『素人演劇の実際』 愛育社、1947〔昭和 22〕年。（『著作集』1994〔平成 6〕年に再録）

関口存男『趣味のドイツ語』 三修社、1954〔昭和 29〕年。（『著作集』1994〔平成 6〕年に再録）

関口存男「木曾谷の新劇運動」 『旬刊ニュース 第三十三号』 東西出版社 1947〔昭和 22〕年:20-21 頁

資料集

『南木曾町誌通史編』 南木曾町誌編さん委員会、1982〔昭和 57〕年。

『南木曾町誌資料編』 南木曾町誌編さん委員会、1982〔昭和 57〕年。

『南木曾の歴史 歴史資料館展示図録』南木曾町博物館、1996〔平成 8〕年。

『企画展「埼玉へ疎開した文化人たち」』 埼玉県平和資料館、2001〔平成 13〕年。

『上智大学史資料集 第 2 集（1913－1928）』 上智学院、1982〔昭和 57〕年。

『法政大学史資料集 第 12 集』 法政大学、1989〔平成元〕年。

『法政大学史資料集 第 13 集』 法政大学、1990〔平成 2〕年。

『法政大学史資料集 第 14 集』 法政大学、1991〔平成 3〕年。

『公民館たより』 妻籠公民館史調査委員会、2001〔平成 13〕年 1 月 8 日、編集者 藤原 勝、特集 演研活動 その 1。

『公民館たより』 妻籠公民館史調査委員会、2001〔平成 13〕年 1 月 20 日、編集者 藤原 勝、特集 演研活動 その 2。

『公民館たより』 妻籠公民館史調査委員会、2001〔平成 13〕年 2 月 15 日、編集者 藤原 勝、特集 演研活動 その 3。

『公民館たより』 妻籠公民館史調査委員会、2001〔平成 13〕年 2 月 25 日、編集者 藤原 勝、特集 演研活動 その 4。

『公民館たより』 妻籠公民館史調査委員会、2001〔平成 13〕年 3 月 13 日、編集者 藤原 勝、特集 演研活動 その 5。

『公民館たより』 妻籠公民館史調査委員会、2001〔平成 13〕年 3 月 20 日、特集 演研活動 その 6 の 1。

『公民館たより』 妻籠公民館史調査委員会、2001〔平成 13〕年 3 月 20 日、特集 演研活動 その 6 の 2。

『公民館たより』 妻籠公民館史調査委員会、2001〔平成 13〕年 4 月 5 日、特集 演研活動 その 7 の 1。

『公民館たより』 妻籠公民館史調査委員会、2001〔平成 13〕年 4 月 5 日、特集 演研活動 その 7 の 2。

『公民館たより』 妻籠公民館史調査委員会、2001〔平成 13〕年 7 月 7 日、特集 演研活動 その 8 の 1。

『公民館たより』 妻籠公民館史調査委員会、2001〔平成 13〕年 7 月 7 日、特集 演研活動 その 8-2 最終号。

和文資料

青山杉作追悼記念刊行会『青山杉作』 青山杉作追悼記念刊行会、1957〔昭和 32〕年。

赤澤史朗「大日本言論報国会——評論界と思想戦——」 赤澤史朗・北河賢三編『文化とファシズム——戦時期日本における文化の光芒』 日本経済評論社、1993〔平成 5〕年:159-205 頁。

赤澤史朗「戦中・戦後文化論」 『岩波講座日本通史』19. 岩波書店、1995〔平成 7〕年。
＝大門正克他編『展望日本歴史 21 民衆世界への問いかけ』 東京堂出版、2001〔平成 13〕年:297-237 頁。引用はこちらから。

緋田工『翼賛壮年団の使命』 日本国体研究所、1942〔昭和 17〕年。

荒木茂雄他編『関口存男』 三修社、1959〔昭和 34〕年。

李承俊『疎開体験の戦後文化史：帰ラレマセン、勝ツマデハ』 青弓社、2019〔令和元〕年。

飯田泰三「第五章 戦時体制下の図書館」 『法政大学図書館一〇〇年史：第一編 図書館通史』 法政大学図書館、2006〔平成 18〕年:87-124 頁。

飯塚友一郎『農村と演劇』 家の光協会、1947〔昭和 22〕年再版（1946〔昭和 21〕年初版）。

池内紀『ことばの哲学 関口存男のこと』 青土社、2010〔平成 22〕年。

井上雄次『丸山薫と岩根沢』 東京書籍、1997〔平成 9〕年。

大門正克「時代を区分するということ——日本近現代史の場合」 歴史学研究会編『現代歴史学の成果と課題 1980—2000 I 歴史学における方法論的転回』 青木書店、2002〔平成 14〕年:140-158 頁。

大門正克他編『展望日本歴史 21 民衆世界への問いかけ』 東京堂出版、2001〔平成 13〕年。

大門正克他編『近現代日本社会の歴史 戦後経験を生きる』 吉川弘文館、2003〔平成 15〕年。

大笹吉雄『日本現代演劇史 明治・大正篇』 白水社、1985〔昭和 60〕年。

大笹吉雄『日本新劇全史』 白水社、2017〔平成 29〕年。

『〈要点〉日本演劇史 ～明治から現代へ～』（財）新国立劇場 運営財団、2020〔令和 2〕年。

大槻宏樹「社会教育の自由と実践 ——妻籠公民館における自己教育の回路——」 『学術研究 ——教育・社会教育・教育心理・体育編——』第 34 号、早稲田大学教育学部、1985〔昭和 60〕年:29-42 頁。

- 岡田昭司「公民館活動の思い出」『環境文化』No.68、環境文化研究所、1985〔昭和 60〕年：10-14 頁。
- 岡野他家夫『日本出版文化史』 原書房、1981〔昭和 56〕年（春歩堂、1959〔昭和 34〕年の新装版）。
- 勝野時雄 「戦後初期の公民館 ——長野県木曾妻籠公民館活動の場合——」『月刊社会教育』No.98、国土社、1966〔昭和 41〕年:88-94 頁。（『戦後社会教育実践史』第 1 巻 民衆社、1974〔昭和 49〕年:42-54 頁に再録）
- 北河賢三「戦時下の地方文化運動——北方文化連盟を中心に——」赤澤史朗・北河賢三編『文化とファシズム——戦時期日本における文化の光芒』 日本経済評論社、1993〔平成 5〕年。
- 北河賢三「戦中・戦後初期の農村文化運動——農山漁村文化協会の成立と活動を中心に——」民衆史研究会編『民衆史研究の視点——地域・文化・マイノリティー——』 三一書房、1997〔平成 9〕年:329-349 頁。
- 北河賢三『戦後の出発：文化運動・青年団・戦争未亡人』 青木書店、2000〔平成 12〕年。
- 北河賢三編『資料集 総力戦と文化 第 1 巻 大政翼賛会文化部和翼賛文化運動』 大月書店、2000〔平成 12〕年。
- 北林雅洋「戦時下日本の『生活の科学化』運動の実態——国民生活科学化協会を中心に——」科学研究費助成事業研究成果報告書（2014〔平成 26〕年 6 月）
<https://kaken.nii.ac.jp/ja/file/KAKENHI-PROJECT-23501202/23501202seika.pdf>
 （頁表示なし、2021 年 12 月 25 日閲覧）
- 木村修吉郎「踏路社追憶一」『劇場』第 1 年 9 月号、演劇文化社、1946〔昭和 21〕年:27-29 頁。
- 栗原成郎「関口語学からスラヴ語学へ」『早稲田言語研究会会報 Travaux du Cercle linguistique de Waseda』第 10 号、2006〔平成 18〕年 4 月:16-19 頁。
- 黒川みどり「地域・疎開・配給——<都市と農村>再考」『講座アジア・太平洋戦争第六巻 日常生活の中の総力戦』 岩波書店、2006〔平成 18〕年:31-60 頁。
- 小林俊彦「史跡保存の実態例——その問題点と住民参加」『地域開発』3 月号、通巻第 78 号、1971〔昭和 46〕年 3 月、(財)日本地域開発センター:35 頁。
- 小林文人『公民館史資料集成』エイデル研究所、1986〔昭和 61〕年。
- 笹川孝一「戦後社会教育実践史研究(その 2) ——第二次大戦後の社会教育実践史における庶民大学三島教室の意義」『人文学報』（東京都立大学人文学部）21 号（184）、1986〔昭和 61〕年:53-123 頁。
- 笹山敬輔『演技術の日本近代』 森話社、2012〔平成 24〕年。
- 佐藤清昭『ドイツ語「関口文法」へのいざない 1 関口存男の言葉』 三修社、2021〔令和 3〕年。
- 佐藤春夫「如是我聞 法政騒動真相実録」『定本佐藤全集』第 20 巻、臨川書店、1999〔平成 11〕年:321-324 頁。
- 大政翼賛会文化部編『素人演劇運動の理念と方策』 翼賛図書刊行会、1942（昭和 17）年。

田中栄三『明治大正昭和演劇史資料』 演劇出版社、1964〔昭和39〕年。

田中美知太郎『時代と私』 文藝春秋 1984〔昭和59〕年。

寺中作雄・鈴木健次郎、社会教育連合会 編纂『公民館シリーズ6 公民館はどうあるべきか』、印刷局発行、1948〔昭和23〕年:68-71頁。

遠山高志「わが国第1号の公民館とは」 『月刊公民館』（全国公民館連合会）第564号（2004〔平成16〕年5月）:22-29頁。

戸板康二 編『対談日本新劇史』 青蛙房、1961〔昭和36〕年。

中田スウラ「戦後初期木曾妻籠公民館運動における演劇活動と青年の自己形成」 『早稲田大学大学院文学研究科紀要別冊 第11集 哲学・史学編』 早稲田大学大学院文学研究科、1985〔昭和60〕年:79-88頁。

中村英雄「関口存男の横顔」 『池上草堂襟記』 角川書店、1989〔平成元〕年。

西村幸夫他編『証言・町並み・保存』 学芸出版社、2007〔平成19〕年。

野上彌生子「小鬼の歌」 『野上弥生子全集』第6巻 岩波書店、1981〔昭和56〕年、295-362頁所収。

野上彌生子「日記」 『野上弥生子全集』第II期 岩波書店、1986〔昭和61〕-1991〔平成3〕年 所収。

野田正穂・中島明子『目白文化村（都市叢書）』 日本経済評論社、1991〔平成3〕年。

原求作『ロシア文法の要点』 水声社、1996〔平成8〕年。

土方与志『土方与志演劇論集 演出者への道』 未来社、1969〔昭和44〕年。

福尾武彦「勝野時雄氏の死を悼む」 『月刊社会教育』第13巻2号（通算135） 国土社、1969〔昭和44〕年2月:48-49頁。

法政大学大原社会問題研究所編『太平洋戦争下の労働運動：日本労働年鑑・特集版』 労働旬報社、1965〔昭和40〕年。

帆刈芳之助『出版書籍商人物事典 第2巻』 金沢文圃閣、2010〔平成22〕年:95頁。

細谷行輝・山下仁・内堀大地『冠詞の思想—関口存男著『冠詞』と意味形態論への招待—』 三修社、2016〔平成28〕年。

本玉元「公民館の成立過程についての一考察 —地方の公民館の設置過程—」 『武庫川女子大紀要（人文・社会科学）』51、2003〔平成15〕年:91-97頁。

牧野紀之『関口ドイツ語学の研究』 鶏鳴双書16 鶏鳴出版、1976〔昭和51〕年。後に増補されて牧野紀之編著『関口ドイツ文法』 未知谷、2013〔平成25〕年。

松本克平『日本新劇史 —新劇貧乏物語—』 筑摩書房、1966〔昭和41〕年。

宮永孝「昭和八、九年の『法政騒動』」、『社会志林』59巻4号、法政大学社会学部学会、2013〔平成25〕年:200-179頁。

安岡健一「敗戦後の疎開文化人による社会運動——京都府胡麻郷開拓地における貴司山治を事例として」 『新しい歴史学のために』（京都民科歴史部会）273号（2009〔平成21〕年）:17-30頁。

澤柳大五郎「レーキ ット事件」 『世界』第54号 1950〔昭和25〕年6月号 岩波書店:107-114頁。

山口廣編『郊外住宅地の系譜』 鹿島出版会、1987〔昭和 62〕年。

吉田則昭『戦時統制とジャーナリズム 1940 年代メディア史』 昭和堂、2021〔令和 3〕年。

米林富男「成人教育の盲点と焦点」『月刊公民館』29 号、第一法規出版、1959〔昭和 34〕年 10 月 1 日発行:2-4 頁。

米林富男「地域開発と公民館」『月刊公民館』82 号、第一法規出版、1964〔昭和 39〕年 3 月 1 日発行:2-5 頁。

欧文資料

KOBAYASHI, Kiyoshi „Sekiguchi-Grammatik und die didaktische Grammatik des Russischen in Japan“. In: Kennosuke Ezawa / Kiyooki Sato / Harald Weydt (Hrsg.) *Sekiguchi-Grammatik und die Linguistik von heute*. Tübingen: Stauffenburg Verlag, 2009. SS. 119-124.

私家版

関口存哉『関口存哉 随筆集』 関口信男、2007〔平成 19〕年。

未刊行の資料

関口日記 1913〔大正 2〕年 12 月 4 日～1918〔大正 7〕年 10 月 11 日、1919〔大正 8〕年 (5 日分)、1920〔大正 9〕年 (10 日分)、1922〔大正 11〕年 (7 月 3 日付のみ) (慶應義塾大学所蔵)

『勝野金政宛関口書簡』 1948〔昭和 23〕年 12 月 (日付不明)。

勝野金政『今日の妻籠』 手記、「昭和五十七〔1982〕年四月」という日付あり。

米林富男『夜明け前』 手記 (執筆年不明)。

以下の方々から資料や情報の提供を受け、また参照した。記して感謝申し上げます。

1993 年－1994 年

関口存男の長男存哉、三女坂西真弓、次男存彦

荒木茂雄、前田完治

2018 年－2019 年 三修社 関口存男展 (Der Mann des Wesens「存在の男」展)

監修：関口純 資料提供：稲田明子、上野友康、米林喜男

2019 年－2021 年 公益財団法人 妻籠を愛する会、古畑和一、HOSEI ミュージアム

(敬称略、五十音順)